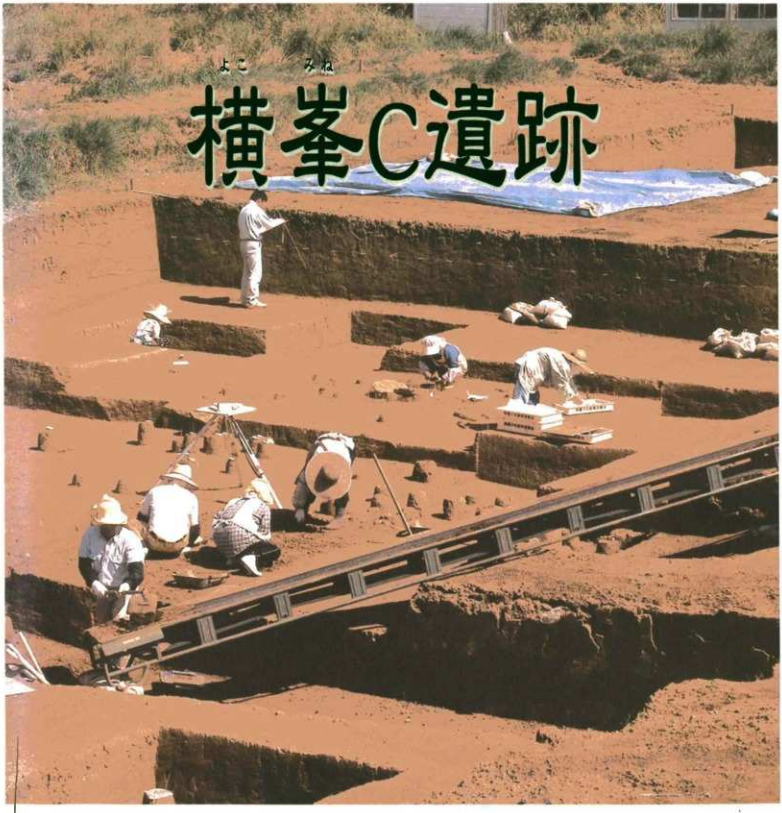
重要遺跡確認調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

横峯C遺跡



2000年3月
鹿児島県南種子町教育委員会

1号礫群断面

1トレンチ全景

1号礫群横下層確認(種Ⅱ火山灰下に礫出土)

3号礫群(検出面が種Ⅳ火山灰、上位の黄色土層がAT火山灰)

序　　文

横峯遺跡において，平成４年の緊急発掘調査によって検出された礫群は，種子島における旧石器文化を知る上で極めて貴重な資料であることと同時に，日本最古の礫群として関係者の注目を集めました。

町では，ここを指定文化財とするなど住民の埋蔵文化財に対する意識は高いものがありました。

そこで，国や県の補助を受けて，今後の遺跡保存や活用を目的として重要遺跡確認調査を実施しました。

調査は，平成８年度から平成10年度まで実施し，平成11年度に整理作業を行い，報告書刊行の運びとなりました。

本報告書が学術的に活用されることはもとより，地域住民の文化財保護に対する意識高揚の一助となることを希望する次第です。

最後に，ご指導をいただいた諸先生方に厚くお礼申し上げます。また，発掘調査の実施と本報告書の刊行にあたり，鹿児島県教育庁文化財課および鹿児島県立埋蔵文化財センター，そして作業にご協力をいただいた方々や島間地区の方々に心から感謝の意を表します。

平成12年３月

鹿児島県南種子町教育委員会

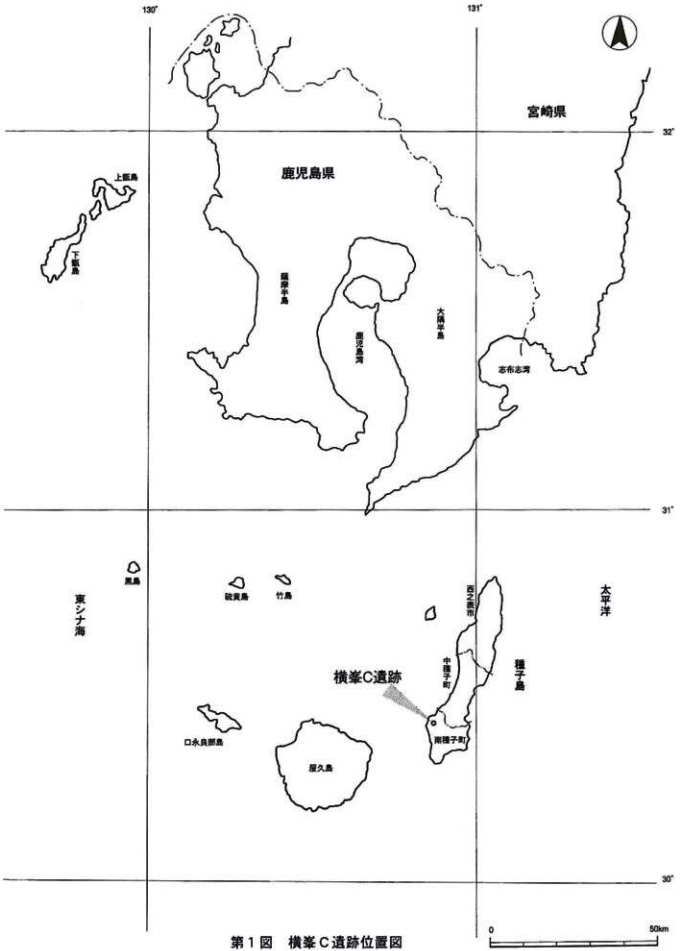
教育長　高　口　　稔

報 告 書 抄 録

ふりがな	よこみねCいせき
書名	横峯C遺跡
副書名	重要遺跡確認調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	8
編集者名	坂口浩一・堂込秀人
編集機関	南種子町教育委員会
所在地	〒891-3792 鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2793-1 TEL 09972-6-1111
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
よこみね 横峯C遺跡	かごしまけんくまげぐん 鹿児島県熊毛郡 みなみたねちょうしまま 南種子町島間 よこみね 横峯	5020		30° 26' 22"	130° 52' 34"	19960826 ～ 19980818	1,577㎡	重要遺跡 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横峯C遺跡	集落跡	旧石器時代	礫群7基 土坑1基 火処1基	敲石・磨石 台石・礫器 チョッパー・フレーク 石核	遺構は，全てそのまま埋め戻して保存。遺物のみ取り上げる。
		縄文時代 （草創期）	集石1基	隆帯文土器 石皿・磨石	
		縄文時代 （早期）	集石4基	土器 石鏃・槍先 スクレーパー 石斧	



第１図　横峯Ｃ遺跡位置図

例　　言

1. 本報告書は，1996年から1998年にかけて南種子町教育委員会が鹿児島県教育庁文化財課の協力で，国庫補助事業により実施した重要遺跡確認調査に伴う横峯C遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書に用いたレベル数値は，鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）が作成した地形図に基づく海抜高である。
3. 挿図の縮尺は各図ごとに示してある。
4. 挿図の遺物出土状況図は，土器●，石器▲，礫△で統一表示してある。
5. 遺物番号は，全て通し番号で本文及び挿図・図版番号と一致する。
6. 本報告書の執筆分担は下記のとおりである。

第Ⅰ章　調査の経過	坂口
第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境	坂口
第Ⅲ章　調査の概要	坂口
第Ⅳ章　各トレンチの状況及び遺構・遺物	坂口・堂込
第Ⅴ章　科学分析結果	
第Ⅵ章　まとめ	堂込

7. 発掘調査における測量・実測・写真撮影，そして整理作業の実測とトレース・写真撮影は，坂口・堂込で行った。なお，写真撮影については県立埋蔵文化財文化財センター鶴田静彦氏の指導・協力を得た。石器の実測は，主に㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
8. 英文要約については，南種子町出身のランキン正子氏（現有明高校教諭－英語　旧姓大川正子）による。
9. 本報告書の編集は，坂口・堂込で行った。

目　　次

巻頭カラー図版１　１号礫群断面・１トレンチ全景

巻頭カラー図版２　１号礫群横下層確認（種Ⅱ火山灰下に礫出土）・３号礫群（検出面が種Ⅳ火山灰，上位の黄色土層がＡＴ火山灰）

序文

報告書抄録

横峯Ｃ遺跡位置図

例言

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1

第１節　調査に至るまでの経過 …… 1

第２節　調査の組織 …… 1

第３節　調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5

第１節　自然環境 …… 5

第２節　歴史的環境 …… 5

第Ⅲ章　調査の概要 …… 14

第１節　調査の概要・方法 …… 14

第２節　土層 …… 21

第Ⅳ章　各トレンチの状況及び遺構・遺物 …… 27

第Ⅴ章　科学分析結果 …… 57

第１節　横峯Ｃ遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定 …… 57

第２節　横峯Ｃ遺跡における花粉分析・珪酸体分析結果 …… 58

第３節　横峯Ｃ遺跡から出土した炭化材の樹種 …… 63

第Ⅵ章　まとめ …… 67

ＳＵＭＭＡＲＹ（英文要約）－巻完

表　目　次

第１表　遺跡地名表(1) …… 8

第２表　遺跡地名表(2) …… 9

第３表　土器観察表 …… 55

第４表　石器計測表 …… 56

挿 図 目 次

第１図　横峯Ｃ遺跡位置図
第２図　横峯Ｃ遺跡と周辺遺跡図 …… 10
第３図　横峯Ｄ遺跡出土隆帯文土器 …… 11
第４図　横峯Ｃ遺跡地形図及びトレンチ配置図 …… 12
第５図　横峯Ｃ遺跡畑地整備施工前の地形図 …… 13
第６図　年度別調査区域図 …… 16
第７図　調査区域層位図 …… 17
第８図　遺構配置図及び旧石器時代石器出土地点図 …… 19
第９図　標準層位模式図 …… 21
第10図　土層断面図(1) …… 24
第11図　土層断面図(2) …… 25
第12図　土層断面図(3) …… 26
第13図　１トレンチ１号礫群・２号礫群 …… 28
第14図　１トレンチ　土坑及び火処遺構 …… 29
第15図　１トレンチ　４号礫群 …… 30
第16図　１トレンチ　６号礫群 …… 31
第17図　１トレンチ出土石器(1) …… 32
第18図　１トレンチ出土石器(2) …… 33
第19図　３トレンチ　縄文時代草創期遺物出土状況及び集石 …… 34
第20図　４トレンチ　縄文時代草創期・早期遺物出土状況 …… 35
第21図　３トレンチ出土隆帯文土器と４トレンチ出土石器(1) …… 37
第22図　４トレンチ出土石器(2) …… 38
第23図　５トレンチ　３号礫群 …… 40
第24図　５トレンチ出土石器 …… 41
第25図　６トレンチ出土遺物 …… 42
第26図　10トレンチ縄文時代草創期遺物出土状況及び出土遺物 …… 43
第27図　11トレンチ出土石器 …… 44
第28図　12トレンチ出土土器 …… 45
第29図　12トレンチ　５号礫群 …… 46
第30図　14トレンチ　縄文時代早期遺物出土状況 …… 47
第31図　14トレンチ　縄文時代早期１号集石 …… 48
第32図　14トレンチ　縄文時代早期２号集石及び３号集石 …… 49
第33図　14トレンチ出土石器 …… 50
第34図　16トレンチ　縄文時代早期４号集石 …… 51
第35図　16トレンチ　７号礫群 …… 52

第36図　16トレンチ出土石器 …… 53
第37図　横峯C遺跡表採遺物 …… 54
第38図　標準土層の模式柱状図及び試料採取層位 …… 61
第39図　各時代の残存遺跡範囲図 …… 66

図　版　目　次

〈科学分析〉
図版1　植物珪酸体・花粉分析プレパラート内の状況 …… 62
図版2　炭化材 …… 65
〈発掘調査〉
図版1　発掘作業状況 …… 71
図版2　1トレンチ1号礫群・1号礫群断面 …… 72
図版3　1号礫群掘り込み状況・1トレンチ2号礫群検出状況 …… 73
図版4　〈平成8年度〉1トレンチ2号礫群（西から）・2号礫群（東から） …… 74
図版5　1トレンチ遺構検出状況（西から）・1トレンチ火処 …… 75
図版6　1トレンチ（東から）・台石周辺検出状況 …… 76
図版7　カーボン検出状況・1トレンチ全景 …… 77
図版8　1トレンチ敲石出土状況（種Ⅳ火山灰直下） …… 78
図版9　1号礫群横下層確認（口絵カラー）・1トレンチ北壁・1トレンチ東壁 …… 79
図版10　2トレンチ礫出土状況・3トレンチ縄文時代草創期遺構検出状況
・3トレンチ縄文時代草創期遺物出土状況 …… 80
図版11　3トレンチ縄文時代草創期集石遺構検出状況・縄文時代草創期集石 …… 81
図版12　3トレンチ土層・4トレンチ縄文時代早期遺物出土状況
・4トレンチAT以下出土状況 …… 82
図版13　4トレンチ種Ⅳ直上（AT下位）台石及び敲石出土状況・敲石・台石 …… 83
図版14　5トレンチ3号礫群検出状況・3号礫群検出状況・AT礫器出土状況 …… 84
図版15　5トレンチ3号礫群 …… 85
図版16　6トレンチ土層・6トレンチ槍先出土状況（縄文時代草創期）・7トレンチ土層 …… 86
図版17　〈平成9年度〉1トレンチAT直上土坑及び石器検出状況・土坑・土坑半截状況 … 87
図版18　1トレンチ土坑及び石器・1トレンチ4号礫群（種Ⅳ下位） …… 88
図版19　1トレンチ拡張部遺構検出状況（東から）・（西から）・1トレンチ4号礫群 …… 89
図版20　4トレンチ遺物出土状況・石皿及び磨石出土状況
・10トレンチ遺物出土状況 …… 90
図版21　10トレンチAT下位礫出土状況・11トレンチ全景
・11トレンチ礫器出土状況（種Ⅳ直上） …… 91

図版22　５トレンチ礫器（No.30）・12トレンチ５号礫群検出状況・５号礫群検出層位 …… 92
図版23　13トレンチ調査状況・14トレンチ遺構検出状況・縄文時代早期１号集石 …… 93
図版24　14トレンチ１号集石・14トレンチ２号集石 …… 94
図版25　（平成10年度）１トレンチ拡張ＡＴ下位遺物出土状況・石核・剥片 …… 95
図版26　１トレンチ拡張６号礫群・１トレンチ４号礫群・カーボン検出状況
・17トレンチ土層 …… 96
図版27　16トレンチ縄文時代早期遺物出土状況・縄文時代早期４号集石
・種Ⅳ直上磨石出土状況 …… 97
図版28　16トレンチ磨石（No.42）・16トレンチＡＴ下位フレーク（No.43）・遺構検出状況 …… 98
図版29　16トレンチ４号集石・16トレンチ７号礫群 …… 99
図版30　16トレンチ７号礫群検出状況・12トレンチ５号礫群 …… 100
図版31　14トレンチ下層確認・14トレンチ下層確認・15トレンチ礫出土状況 …… 101
図版32　作業状況（１トレンチ拡張）・作業状況（16トレンチ）・埋め戻し状況 …… 102
図版33　町三役視察・河口貞徳先生現場指導・別府大学教授橘昌信先生現場指導 …… 103
図版34　文化庁岡村道雄先生現場指導・文化庁小林克先生現場指導
・岡山大学教授稲田孝司先生遺物指導 …… 104
図版35　遺物写真(1) …… 105
図版36　遺物写真(2) …… 106
図版37　遺物写真(3) …… 107
図版38　遺物写真(4) …… 108
図版39　遺物写真(5) …… 109
図版40　遺物写真(6) …… 110
図版41　遺跡写真(7)・横峯Ｄ遺跡出土隆帯文土器 …… 111
図版42　発掘作業参加者　平成８年度・平成９年度・平成10年度 …… 112
図版43　整理作業員の方々 …… 113

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）は，鹿児島県熊毛郡南種子町大字島間字横峯において県営緊急畑地帯総合整備事業横峯地区を計画した。

これを受けて，南種子町教育委員会（以下，町教育委員会）が調査主体となり，県立埋蔵文化財センターの協力で平成４年度に緊急発掘調査を実施した。その結果，横峯Ｃ遺跡において種Ⅳ火山灰の下位から２基の礫群が検出された。そこで，この礫群から採取された炭化物を放射性炭素年代測定法で分析した結果，約３万年前より以前の遺構であることが判明した。このことは，日本最古の礫群として多くの関係者の注目を集めることとなった。

町では，この重要性から地域住民や受益者と協議を行い，横峯Ｃ遺跡を事業区域から除外し現地保存した。また，遺跡を町指定文化財（平成７年９月28日付）とした。

この調査結果を基に，更に詳細な調査を行い今後の遺跡保存・活用を図るため，国庫補助を受けて平成８年度から平成10年度まで重要遺跡確認調査を実施することになった。調査は，町教育委員会が調査主体となり鹿児島県教育庁文化財課の協力を得て行った。平成11年度は，鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得て，整理作業と報告書作成を実施した。

第２節　調査の組織

調査主体	南種子町教育委員会		
調査総括	〃	教育長	堂ノ脇大雄（平成８年度）
〃	〃	〃	高口　稔（平成９～11年度）
調査事務	〃	社会教育課長	平畠　典男（平成８・９年度）
〃	〃		立石　靖夫（平成10・11年度）
〃	〃	体育文化係長	原　隆昭
〃	〃	主事	河野　彰子（平成８・９年度）
〃	〃	〃	中町　美保（平成10・11年度）
調査担当	〃	文化財主事	坂口　浩一
〃	鹿児島県教育庁文化財課	〃	堂込　秀人（平成８～10年度）
〃	鹿児島県立埋蔵文化財センター	〃	〃（平成11年度）
調査指導者	鹿児島県考古学会	会長	河口　貞徳
〃	文化庁記念物課	主任文化財調査官	岡村　道雄
〃	〃	文化財調査官	小林　克
〃	別府大学文学部	教授	橘　昌信
遺物指導者	岡山大学文学部	教授	稲田　孝司

〈平成８年度〉発掘作業員　河北五男，峯山亘，島元安治，坂口秀夫，鮫島江美子，川元敏子
元川シズエ，積ヤエ，小西和子，坂口和子，岩坪ノリ子，寺川順子
岩元ミユキ，岩元ミチエ，峯山徳美，寺川洵子，豊島幸子，坂口ミヨ
島元アキミ，日高ハツミ，山下トネ子，精松チワ子（故人）
整理作業員　岩元ミユキ，池亀民枝，中峰久美子，
〈平成９年度〉発掘作業員　柳田　弘，坂口秀夫，中川義守，川脇文子，鮫島江美子，西園六代
河北真貴子，川元敏子，元川シズエ，稲川ナナ子，積ヤエ，小西和子
山下トネ子，浦邊君江，長田よし子，古市優子，古市悦子，安藤隣子
岩坪ノリ子，坂口和子，寺川順子，坂口ミヨ，日高ハツミ
整理作業員　西園六代
〈平成10年度〉発掘作業員　柳田弘，日高宏，古市強，川脇文子，中之薗美津江，久保田かおり
鮫島江美子，河北真貴子，元川シズエ，稲川ナナ子，田中真由美
川元敏子，西園六代
整理作業員　西園六代，河北真貴子，久保田かおり
〈平成11年度〉整理作業員　西園六代，中村睦美，河北真貴子，久保田かおり，西田りえ子

第３節　調査の経過

発掘調査は，平成８年８月26日～12月９日（34日間），平成９年10月１日～11月７日（26日間），平成10年６月29日～８月18日（26日間）の実働86日間実施した。以下，調査の経過については日誌抄にて記載する。

平成８年度（平成８年８月26日～12月９日）

８月26日（月）～８月30日（金）

オリエンテーション。平成４年度の調査に基づき，遺跡内に10m×10mグリッドを設定した後１～３トレンチを設定する。ＡＴ火山灰から下位の調査は，ベルトコンベアを設置し，作業員により２m×２mの小グリッドを千鳥掘りする。１トレンチの１号礫群と２号礫群の再検出を行う。３トレンチで隆帯文土器片が出土する。２号礫群に近接して敲石が出土する。

猛暑のため遮光ネットを張り作業を行う。

東京大学文学部考古学研究室助手大塚達朗氏，県立埋蔵文化財センター大久保氏来跡。

９月２日（月）～９月５日（木）

４～８トレンチを設定する。３トレンチで縄文時代草創期の集石が検出される。４トレンチでは縄文時代早期の土器片が出土する。１トレンチの拡張をする。

猛暑による空気の乾燥で土壁に亀裂と崩落が著しい。

種子島開発総合センター所長鮫島氏・沖田氏来跡。町民４名が見学にくる。

９月９日（月）～９月13日（金）

６・７トレンチで縄文時代早期の土器片が数点出土する。１トレンチのＡＴ火山灰下位から直径約50cmの台石３点が出土する。震度４の地震があるが被害なし。

県考古学会長河口貞徳氏，県立埋蔵文化財センター中村（和）氏来跡。

9月17日（火）～9月20日（金）

1・4・5・6トレンチに小グリッドを設定。台風17号接近のため防災対策をする。

町長へ発掘成果の中間報告。

鹿児島大学文学部上村俊雄教授，雨宮瑞生氏，県立埋蔵文化財センター大久保氏，中種子町教育委員会田平氏，町教育委員，教育長外職員2名，南日本新聞社来跡。

9月24日（火）～9月27日（金）

発掘指導で別府大学文学部教授橘昌信氏来跡。

4トレンチの種Ⅳ火山灰直下から敲石と台石が出土する。5トレンチのＡＴ火山灰下位から礫群が検出され，同時期の礫器も出土する。

町長室にて調査内容報告。（出席者：橘教授，堂込，町長，助役，収入役，教育長，社会教育課長，体育文化係長，坂口）。

台風21号接近のため調査中止。遺構・遺物の防災対策。

9月30日（月）～10月4日（金）

台風の防災対策。通過後，調査開始前にポンプを用いてトレンチ内の排水作業をする。

トレンチ位置図の平面実測をする。

鹿児島大学理学部森脇教授，県立埋蔵文化財センター中村（和）氏・児玉氏，種子島開発総合センター神田氏来跡。

10月7日（月）～10月11日（金）

遺跡の南端に9トレンチを設定する。発掘指導で県考古学会長河口貞徳氏来跡。

町長室にて今後の調査方法を協議（出席者：戸崎係長，堂込氏，町長，助役，教育長，社会教育課長，坂口）

県教育庁文化財課戸崎係長，町長，助役，教育長，町役場職員1名来跡。

10月14日（月）～10月18日（金）

遺構・台石をシートで保護をする。発掘作業終了。プレハブ及び作業用具の清掃・撤収。

熊毛新聞社，ＫＴＳ記者，熊毛支庁土地改良課長他職員3名，町農地整備課職員2名，町企画課広報係，中種子高校職員来跡。

12月9日（月）

検出された集石と礫群及び台石を白砂とブルーシートで保護をした後，重機で埋め戻す。

平成9年度（平成9年10月1日～11月7日）

10月1日（水）～10月3日（金）

オリエンテーションの後，作業開始。10～14トレンチの設定をする。

県立埋蔵文化財センター冨田氏，町企画課職員1名来跡。

10月6日（月）～10月9日（木）

10トレンチで縄文時代草創期の土器片が出土する。12トレンチで縄文時代早期の土器出土。15トレンチを設定。1号・2号礫群と台石の再検出をする。

町企画課職員1名来跡。

10月13日（月）～10月17日（金）

発掘指導で文化庁記念物課主任文化財調査官岡村道雄氏来跡。

４トレンチで，縄文時代草創期の土器と石皿・磨石が出土する。14トレンチでは早期の集石・石斧・石鏃が検出される。

県文化財課戸崎係長，町社会教育課長来跡。

10月19日（月）～10月24日（金）

11トレンチの種Ⅳ火山灰直上で頁岩製の礫器が出土する。14トレンチでチャート製石鏃が出土する。

10月27日（月）～10月31日（金）

ＡＴ火山灰下位から５号礫群が検出される。１トレンチのＡＴ火山灰検出面で，方形土坑を検出する。

別府大学文学部教授橘昌信氏，西日本新聞記者来跡。

中種子町立切遺跡の礫群・土坑・石器の出土が報道される。

11月４日（火）～11月７日（金）

１トレンチで，種Ⅳ火山灰直下から４号礫群を検出する。

作業員で１・４・12・14トレンチの遺構を白砂とシートで保護の後，重機で埋め戻す。

平成10年度（平成10年６月29日～８月18日）

６月29日（月）～７月２日（木）

オリエンテーション。作業用具の搬入をする。１トレンチの方形土坑を中心に調査範囲拡張。12トレンチの５号礫群検出作業から調査開始する。16・17・18トレンチの設定。

７月６日（月）～７月10日（金）

１トレンチの方形土坑周辺のピット掘り下げをする。

７月13日（月）～７月17日（金）

４号・５号礫群の検出・実測・写真撮影をする。

７月21日（火）～７月24日（金）

発掘指導で文化庁記念物課文化財調査官小林克氏・県文化財課戸崎係長来跡。

７月27日（月）～７月31日（金）

16トレンチで，ＡＴ火山灰下位から頁岩製の磨石が出土する。ＡＴ火山灰直下から７号礫群が検出される。１トレンチで，ＡＴ火山灰下位からコアとチップが出土する。

８月３日（月）～８月７日（金）

実測・写真撮影の後，１トレンチの礫群を白砂にて埋め戻す。

鹿児島大学文学部教授上村俊雄氏，県立埋蔵文化財センター大久保氏来跡。

８月17日（月）～８月18日（金）

作業員により礫群・石器出土跡を白砂・ブルーシートで保護の後，重機にて埋め戻す。

調査終了。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　自然環境

南種子町の所在する種子島は，大隅半島最南端の佐多岬から南東約40kmの洋上に位置する。面積は，447.09㎢，延長52km，幅12kmで野間の地峡部では約６kmにしか過ぎない。最高海抜は，282.3mの比較的平らで，九州最高峰の宮之浦岳（標高1935m）を有する屋久島とは地形的に対照的な島である。島の長軸は，北北東から南南西に細長く伸びており，九州本土や琉球列島の配列にほぼ近い。

地質構造は，島全体に海岸段丘がよく発達しており，北部の国上丘陵地域では高度60m，中部の中山から油久にかけては高度80m，南部の門倉付近では高度100mにも達する。

南種子町は種子島の南部を占め，東西南の三方向が海に面し北は中種子町を境にする。

面積は110.21㎢で熊毛諸島の各市町の中では最も狭い。地形は，長谷原尾の212.2mを最高点にして，上中地域に緩やかに高度を減じながら西之まで180m～200mの平坦な台地を形成する。

海岸段丘は，西海岸の島間から門倉岬にかけてよく発達している。高度100mの段丘が一番顕著で，海岸線に沿って南北に延びている。また，この下位に高度60mの段丘面があり，集落を形成するが急傾斜を成して海に迫っている。東海岸は著しく開析を受けた100m以下の台地で谷系の発達が著しく，海岸段丘は殆ど見られない。

南種子町の地質は，基盤を成す熊毛層群（砂岩と頁岩の互層）が西海岸から中央台地にかけて広く分布し，中心地上中付近から東海岸にかけては，茎永層群が基盤の熊毛層群を覆っている。島間岬から南にみられる西之表層は，淘汰のよい中粒砂岩の厚層を頻繁に狭在する砂岩優勢の砂泥互層からなっている。また，島間岬の灯台近くには，石英斑岩の露頭がある。熊毛層群との接触部ははっきりしないが，周辺の砂岩はいくらかの熱変成を受けてホルンフェルス化している。海岸では石英斑岩の円礫が多くみられ，南下するにつれて礫は小さくなっている。

横峯Ｃ遺跡は，行政区分上は，鹿児島県熊毛郡南種子町島間に所在する。役場の所在する上中から島間に向かう国道58号線の沿線にある。西海岸から約２km内陸部に向かい，約20km離れた屋久島を望む標高120m台地上に位置する。遺跡周辺はいくつもの小さな谷が入り込み，八手状の地形を呈しており，その基部に横峯Ｃ遺跡は立地する。また，この遺跡から北東方向に谷を越えた台地上には，縄文時代草創期の隆帯文土器が採集された横峯Ｄ遺跡がある。

第２節　歴史的環境

南西諸島は，大きく三つの文化圏に分けられる。九州本土の文化を強く受けている薩南諸島（種子島・屋久島）を北部圏，南九州の影響を受けつつも独自の土器文化圏を発達させた地域（奄美諸島・沖縄諸島）が中部圏，日本文化の影響を殆ど及ばず台湾・フィリピンなどの強い南方文化が特色の地域（先島諸島）が南部圏である。

北部圏に属する種子島では，旧石器時代の遺跡はこれまで見つかっておらず，この横峯Ｃ遺跡において検出された礫群により旧石器時代研究は，始まったといえる。

南種子町の遺跡分布を時代毎に記述する。

旧石器時代

後期旧石器時代の遺跡は，1992年に横峯C遺跡の礫群が発見されて以降，近年になって中種子町立切遺跡において横峯C遺跡とほぼ同時期の礫群・焼土・土坑に伴い，磨石・敲石・台石・石斧などがセットで発見された。種子島において，これまでに確認されている旧石器時代の遺跡は，西之表市の大中峯遺跡・湊遺跡がある。

縄文時代

草創期の遺跡は，前述した隆帯文土器の採取された横峯D遺跡（5）がある。

この遺跡は，横峯C遺跡とほぼ同じ標高にあり，舌状をした台地上に立地する。採取地点は，防風帯に残存するアカホヤ火山灰から約1m下位に露出して採取されたものである。遺物は，第3図のとおりである。いずれも赤褐色を呈しており，焼成は悪く極めて脆い。器壁はやや厚い大型深鉢の胴部片で，採取された部分でも約38cmの径を測る。表裏ともに横ナデ調整であるが，仕上げは粗悪で指オサエや接合部も観察される。器壁に約5cmの間隔で3条の隆帯が貼り付けられている。この隆帯上には，指頭もしくは箆状工具による圧痕が連続して施文されている。種子島では，西之表市奥ノ仁田遺跡の3類土器[1]・中種子町三角山遺跡などに類似する土器が出土している。

早期の遺跡は，平成10年に発掘調査を行い岩本式土器の出土した上平遺跡（46），吉田式土器の出土した長谷遺跡（13），昭和62年に発掘調査を行い塞ノ神式土器の出土した小牧遺跡（11），平成7年に発掘調査を行い塞ノ神式土器や磨製石鏃の出土した石ノ峯遺跡（1）などがある。

前期の遺跡では，昭和62年に発掘調査をした平六間伏遺跡（10），赤石牟田遺跡（12），轟式土器の出土した上平遺跡（46）などがある。

中期の遺跡はこれまで発見されていない。

後期の遺跡は，平成2年発掘調査を行った一湊式土器の単純遺跡である野大野A遺跡（16）や，茶木久保遺跡（37），田尾遺跡（8），平成3年に発掘調査を行い市来式土器・丸尾式土器の出土した松原遺跡（6）などがある。中でも，平成9年に発掘調査を行い66基の配石遺構と市来式土器・納曽式土器・丸尾式土器・石斧・磨石・敲石・石皿などの遺物が多量に出土した藤平小田遺跡(40)は特筆するところである。

晩期の遺跡は，黒川式土器と人骨・貝製品などの出土した一陣長崎鼻貝塚（23），松原遺跡（6）などがある。

弥生時代

平山の広田海岸に面する砂丘に立地する埋葬遺跡で，113体にも及ぶ人骨と夥しい副葬貝製品が出土した広田遺跡（25）が著名である。また，本村塚の峯遺跡（20），本村丸田遺跡（21），浜田嵐遺跡（24）がある。

歴史時代

昭和60年に発掘調査を行い平安時代の掘立柱建物跡の検出された本村丸田遺跡（21）が知られている。出土した遺物には，土師器・須恵器・石斧などがある。

[参考文献]

南種子町教育委員会	「本村丸田遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)	1986
〃	「小牧遺跡・平六間伏遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)	1988
〃	「野大野A遺跡・上浜田A遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)	1991
〃	「槻峯遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)	1993
〃	「松原遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)	1993
〃	「石ノ峯遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)	1996
〃	「掛久保遺跡・ヌカス遺跡・嵐遺跡・今平遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)	1996
〃	「藤平小田遺跡」	埋蔵文化財発掘調査事業報告書	1998
〃	「上平遺跡」	埋蔵文化財発掘調査事業報告書	1999
盛園尚孝	「広田遺跡に関する調査報告書」		1995
南種子町郷土誌編纂委員会	「南種子町郷土誌」		1987
(1)西之表教育委員会	「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」	西之表埋蔵文化財発掘調査報告書(7)	1995

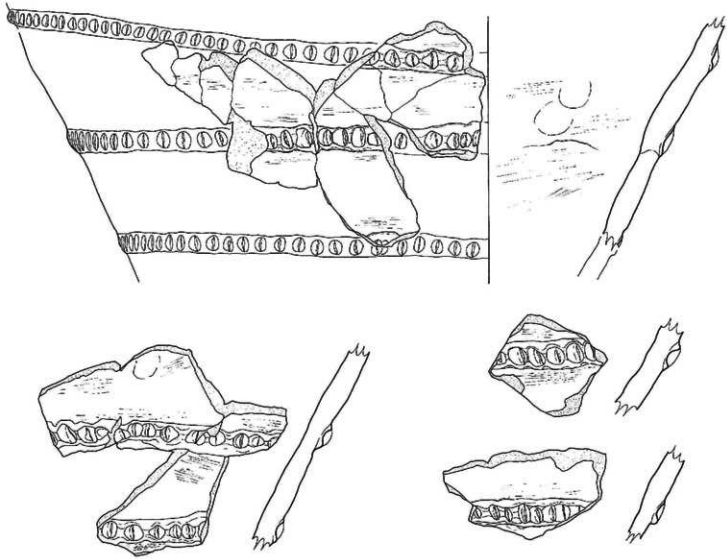
第1表　遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時　代	遺　物　等	備　考
1	石ノ峯	中之上　石ノ峯	台地	縄文（早期）	磨製石鏃・磨石・敲石・石皿・塞ノ神式・平栫式	平成6･7年発掘調査
2	横峯A	島間　横峯	〃	縄文	土器片	平成3年分布調査
3	横峯B	〃	〃	〃	土器片	平成4年発掘調査
4	横峯C	〃	〃	旧石器 縄文（草創期・早期）	礫群・礫器・隆帯文・集石・石鏃・石斧・敲石・塞ノ神式・苦浜式・轟式	平成4･8～10年発掘調査
5	横峯D	〃	〃	縄文(草創期)	隆帯文	平成7年分布調査
6	松原	茎永　松原	平地	縄文・弥生・奈良・平安	土師器・集石・須恵器・青磁・市来式・丸尾式・指宿式・石斧・磨石・石皿	平成4年発掘調査
7	下鹿野	島間　下鹿野	台地		石鏃	平成2年分布調査
8	田尾	島間　田尾	〃	縄文（後期）	市来式・磨製石斧・磨石・敲石・石皿	表面調査による出土
9	上妻城址	島間　向方	〃	中世		中世城館跡（昭和58年県文化課調査）
10	平六間伏	中之上　平六間伏	〃	縄文	土器片・石斧	昭和62年発掘調査
11	小牧	中之上　小牧	〃	縄文（早期）	塞ノ神式・磨石・敲石	〃
12	赤石牟田	長谷　赤石牟田	〃	縄文（早期・前期）	曽畑式・塞ノ神式・石鏃・石錐・黒耀石・石匙・石斧・集石	平成4年分布調査
13	長谷	長谷	〃	縄文（早期）	吉田式	表面調査による出土
14	上里城址	茎永　上里	〃	中世		中世城館跡（昭和58年県文化課調査）
15	野大野	西之　野大野	〃	縄文（後期）	市来式・磨製石斧・敲石	表面調査による出土
16	野大野A	〃	〃	〃	一湊式・敲石・磨石・石皿	平成2年発掘調査
17	上瀬田A	西之　上瀬田	〃	縄文	土器片	〃
18	上瀬田B	〃	〃	〃	〃	昭和63年分布調査
19	今平	西之　今平	〃	縄文（早期・前期）	塞ノ神式・土器片	平成7年度発掘調査
20	本村塚の峯	西之　本村塚の峯	斜面地	弥生（後期）	土器片	
21	本村丸田	西之 本村丸田	台地	縄文（後期） 弥生（後期） 平安	指宿式・市来式・曽畑式・石斧・磨石 弥生土器・土師器 須恵器・陶磁器	昭和60年発掘調査
22	本村宇都	西之 本村宇都	斜面地	弥生（後期）	土器片	
23	一陣長崎鼻貝塚	中之下　一陣	砂丘地	縄文（晩期）	黒川式・磨製石斧・骨製髪飾り・骨鏃・貝輪・人魚骨・貝類	昭和31年発掘調査
24	浜田嵐	平山　浜田嵐	平地	弥生（中期）	土器片（須玖式）	
25	広田	平山　広田	砂丘地	弥生 （中期・後期） 古墳 （前期）	弥生土器・人骨113体余・貝製品・銛鏃車・石鏃・鉄製釣針・獣魚骨・貝類	昭和32～34年発掘調査 埋葬址考古学雑誌43巻3号，日本考古学協会発表(24回総会)，福岡医学雑誌52巻8号，種子島民族集7号広田の民族
26	銭亀	西之　銭亀	台地	縄文（早期）	土器片・集石	平成11年発掘調査
27	駒取野	西之　駒取野	〃	〃	土器片	平成11年分布調査
28	西之大宮田	西之　大宮田	砂丘地	中世	染付・土師器	〃

第2表　遺跡地名表(2)

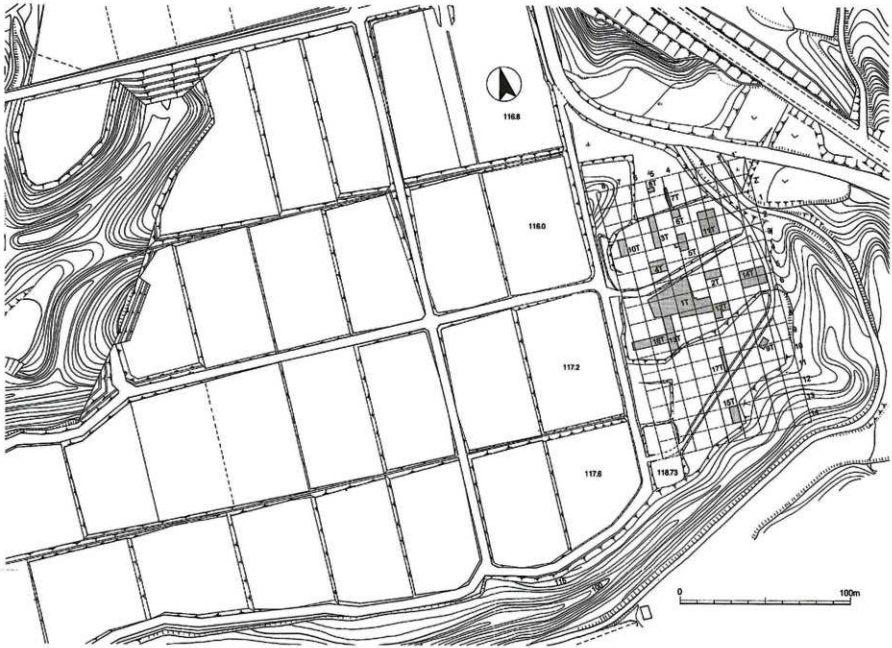
番号	遺跡名	所在地	地形	時　代	遺　物　等	備　考
29	真所沙入	中之下　東真所沙入・西真所沙入	砂丘地	中世	染付・青磁・白磁・土師器	平成4年分布調査
30	友心沙入A	茎永　友心沙入	〃	〃	土師器	〃
31	友心沙入B	〃	〃	〃	〃	〃
32	安久保	西之　安久保	台地	縄文(早期)	吉田式	〃
33	福ケ野A	平山　福ケ野	〃	縄文	土器片	〃
34	福ケ野B	〃	〃	縄文（前期・後期)・古墳	縄文土器・成川式	〃
35	有尾	中之上　有尾	〃	縄文	土器片	平成7年分布調査
36	摺久保	中之上　摺久保	〃	縄文(早期)・弥生	塞ノ神式・弥生土器片	平成7年発掘調査
37	茶木久保	島間　茶木久保	〃	縄文（後期）	土器片・石鏃	平成6年発掘調査
38	高峯	島間　高峯	〃	縄文（後期）	土器片	平成10年発掘調査
39	龍安坂	西之　龍安坂	〃	縄文（早期）	前平式・凹石	平成7年発掘調査
40	藤平小田	島間　藤平小田	〃	縄文（後期) 中世	市来式・丸尾式・指宿式・松山式・一湊式・台付皿など・石鏃・石斧・磨石・敲石・凹石・石皿・石製品他 配石遺構・集石・大型土坑 染付・土師器・青磁・掘立柱建物跡	平成10年発掘調査
41	新牧	西之　新牧	〃	縄文	土器片	平成9年発掘調査
42	塩浦口	西之　塩浦口	〃	〃	〃	〃
43	橋久保	西之　橋久保	〃	〃	〃	平成7年分布調査
44	上松原沙入	茎永　上松原沙入	砂丘地	中世	製塩土器	平成4年分布調査
45	松原山	茎永　松原山	〃	縄文	台石	〃
46	上平	平山　上平	台地	縄文（早期・前期)・中世	岩本式・轟式・石鏃・石斧	平成10年発掘調査
47	西大曲	中之下　西大曲	〃	縄文	土器片	平成7年分布調査
48	鍔口	中之下　真所	—	応永		(県)昭和42.3.31考古資料
49	椿山A	中之上　椿山	台地	縄文	〃	平成8年分布調査
50	椿山B	〃	〃	縄文（早期）	塞ノ神式	〃
51	堂ノ中野	中之下　堂ノ中野	〃	縄文	土器片	平成9年分布調査
52	有鹿野	島間　有鹿野	台地	縄文（後期）	市来式・磨石・敲石・石斧	〃
53	横峯E	島間　横峯	〃	旧石器・縄文		平成10年分布調査 (周知遺跡の隣接地)
54	稲野	島間　稲野	〃	弥生	土器片	平成10年分布調査
55	丸野	中之上　丸野	〃	縄文	〃	〃
56	笹	中之上　笹	〃	〃	〃	〃
57	徳丸ケ野	西之　徳丸ケ野	〃	縄文(後期)・中世	市来式・丸尾式・磨石・敲石・石皿	〃
58	高鼻	西之　高鼻	〃	古墳	土器片	〃
59	椿山C	島間　椿山	〃	縄文	土器片・磨石	表面調査による出土

第２図　横峯Ｃ遺跡と周辺遺跡図

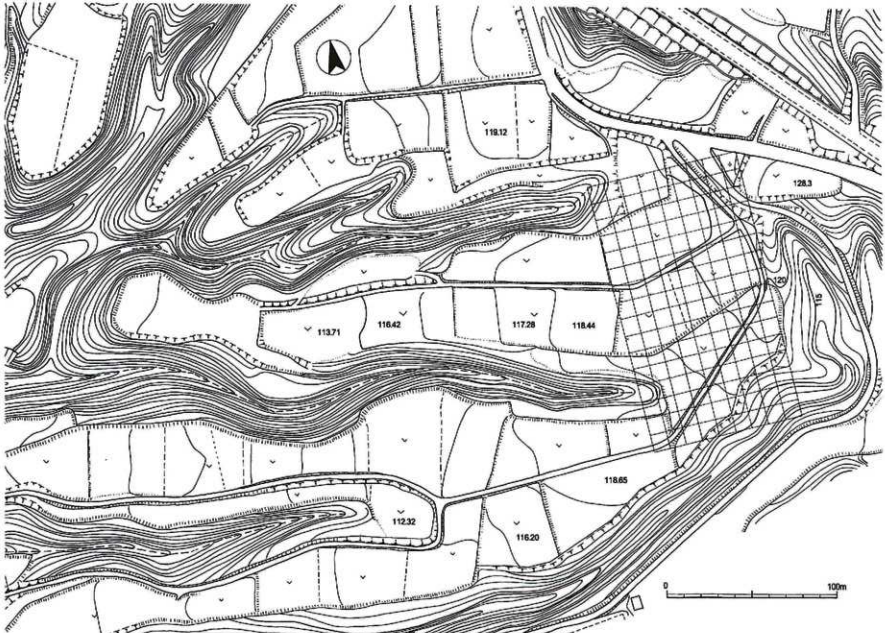


第３図　横峯Ｄ遺跡出土隆帯文土器

0　10cm



第４図　横峯Ｃ遺跡地形図及びトレンチ配置図



第５図　横峯Ｃ遺跡畑地整備施工前の地形図

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の概要・方法

横峯Ｃ遺跡は，東から西方向へと緩やかに傾斜する標高約120mの台地上に位置する。周辺にはいくつもの小さな谷が入り込んでおり，いわゆる八つ手状の地形を呈している。遺跡はその基部に立地する。遺跡の南部に大きく入り込む谷には現在でも湧水があり東シナ海へと東流している。

調査は，平成８年度から平成10年度までに合計実働86日間実施した。

調査の基準測量は，平成４年度の緊急発掘調査の基準杭に基づき，10m×10mの大グリッドをＡ１区，Ａ２区，……Ｂ１区，Ｂ２区，……とした。また，ＡＴ火山灰から下位の旧石器時代の調査にあたっては，２m×２mの小グリッドをａ１～ａ５…ｅ１～ｅ５と設定した。トレンチの大きさは，５m×10mを基準としたが，詳細調査を必要とする部分については範囲を拡張した。

横峯Ｃ遺跡は，遺跡の大部分が平成４年度の緊急発掘調査で縄文時代早期の調査を終えている。今回は，旧石器時代の調査を主体として計画された。但し，近年になって同様の立地条件で隣接する横峯Ｄ遺跡において，隆帯文土器が採取されていることから縄文時代草創期の調査も実施することとした。また，草創期相当層下位からＡＴ火山灰までは重機により慎重に掘り下げた後，小グリッドを作業員により市松模様状に掘り下げた。

今回のトレンチ調査面積は，1,577㎡になった。但し，年度ごとの調査面積は，平成８年度が645㎡，平成９年度が728㎡，平成10年度が325㎡で合計1,698㎡となる。これは，年度によって調査区域が重複するためである。

詳細については，調査年度毎に略述する。

平成８年度（調査面積645㎡）

トレンチ配置は，平成４年度に検出されたＥ６区の１号礫群を中心に，５m×10mを基本として１トレンチから９トレンチまでの９本設定した。

調査は，１トレンチで埋め戻し保護されている旧石器時代の１号礫群と２号礫群の再検出から実施した。１号礫群は，半截し下層確認を実施した。また，２号礫群については，平成４年度に約半分の検出で終了していたため，東方向に調査区域を拡大し全貌を確認することにした。遺物は，２号礫群から約2.5m隔てたところで同時期のものと思われる敲石が出土した。また，このトレンチからは40～50cmを測る台石３点も出土し，周辺では無数の炭化物が確認された。４トレンチでは，ＡＴ火山灰の直下から。敲石と台石が出土した。また，５トレンチでは，ＡＴ火山灰の直下から３号礫群が検出された。更に，同時期と思われる礫器１点も出土した。

１・２・３号礫群及び１トレンチの台石周辺のカーボンについては，放射性炭素（^{14}Ｃ）年代測定（加速器質量分析法）を実施した。

礫群検出以外の範囲については，縄文時代草創期の調査から実施した。遺物包含層が確認されたのは３トレンチだけで，表土から約20cm掘り下げたところで，集石１基と隆帯文土器の小片が数点確認された。

６トレンチからは，早期の土器片数点と石槍が出土した。

今回検出された遺構と１トレンチの台石については，白砂にて埋め戻し現地保存した。

２・８・９トレンチでは遺構・遺物の確認はされなかった。

平成９年度（調査面積728㎡）

５m×10mを基本とするトレンチを10トレンチから15トレンチまで設定した。

１トレンチは，１号・２号礫群の周辺を拡張した。その結果，種Ⅳ火山灰直下で４号礫群が検出された。また，トレンチの南東端でＡＴ火山灰検出面において約85×40cmの方形土坑が検出された。12トレンチでは，ＡＴ火山灰直下で５号礫群が検出された。

縄文時代草創期の調査では，３トレンチで隆帯文土器の出土した付近を中心に新しくトレンチを設定した。また，包蔵範囲確認のためＢ８区に10トレンチを設定した。

14トレンチでは，早期の集石３基と同時期と思われる石斧・石鏃・土器片等が出土した。

13・15トレンチで遺構・遺物の確認はされなかった。

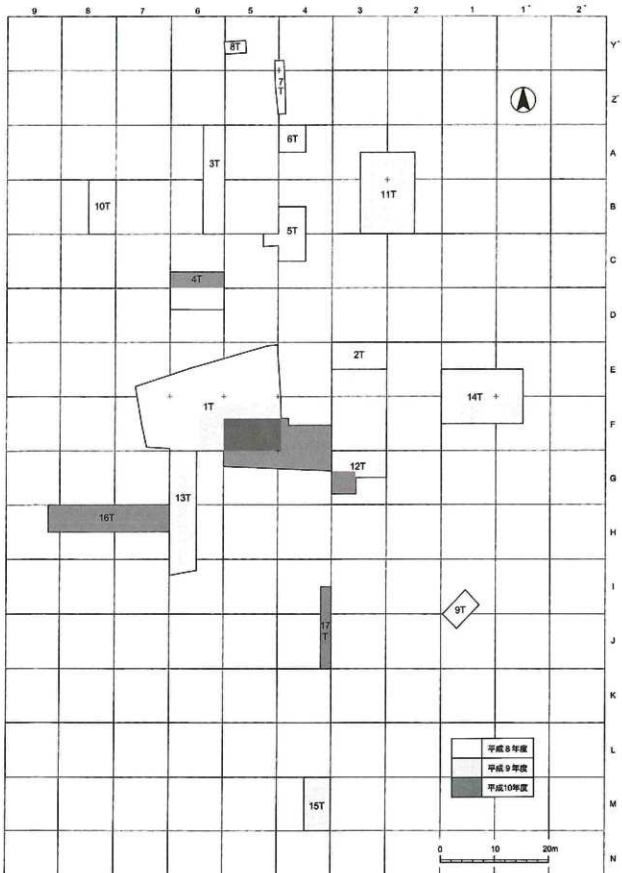
検出された遺構については，白砂で埋め戻し現地保存した。

平成10年度（調査面積325㎡）

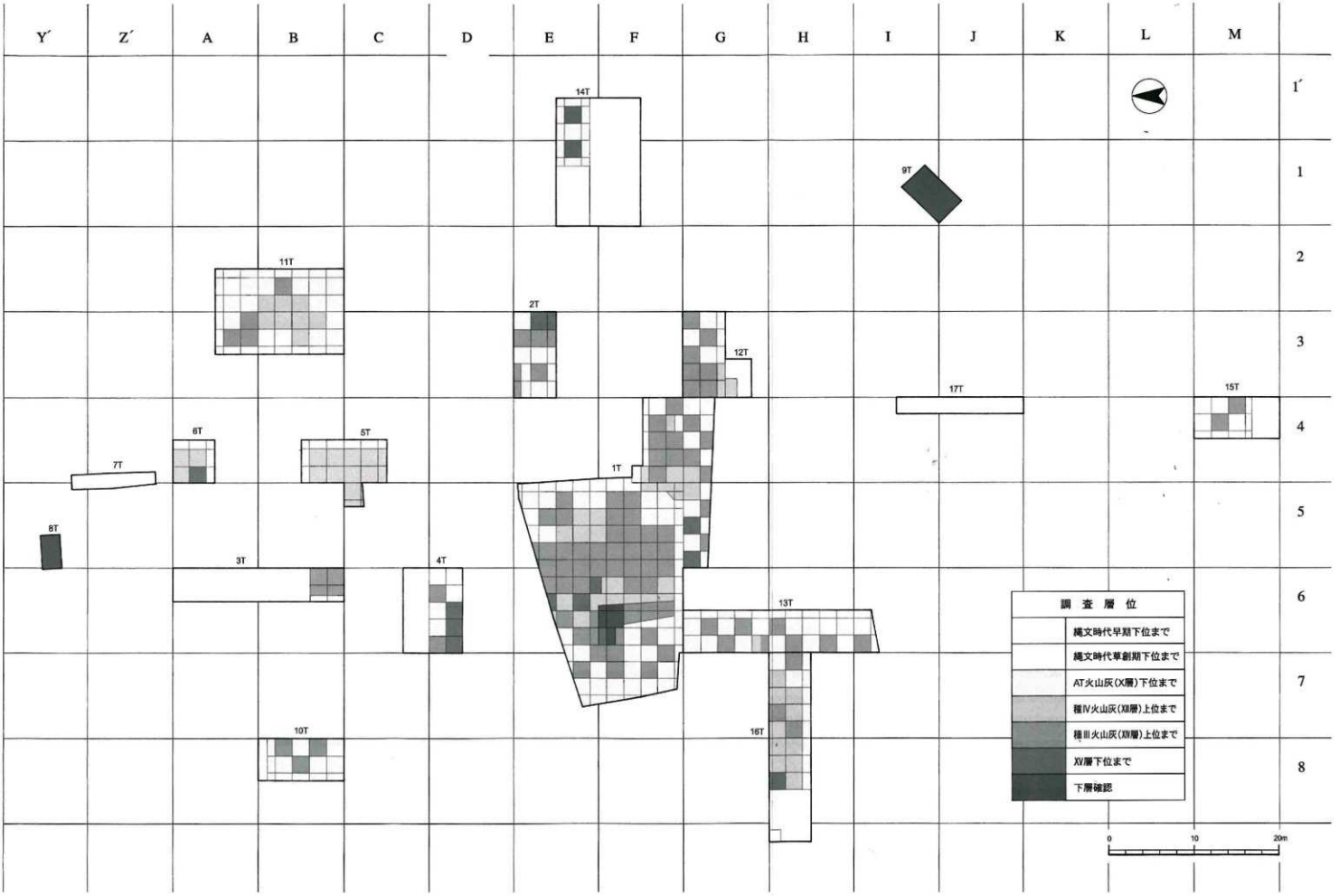
１・12トレンチの調査範囲を拡張し，新たに16・17トレンチを設定した。

１トレンチにおいては，平成９年度に検出された旧石器時代の方形土坑と４号礫群を中心に調査区域を拡張した。12トレンチでは５号礫群を約半分検出して終了していたため，調査区域を南側に拡張し全貌を把握することとした。

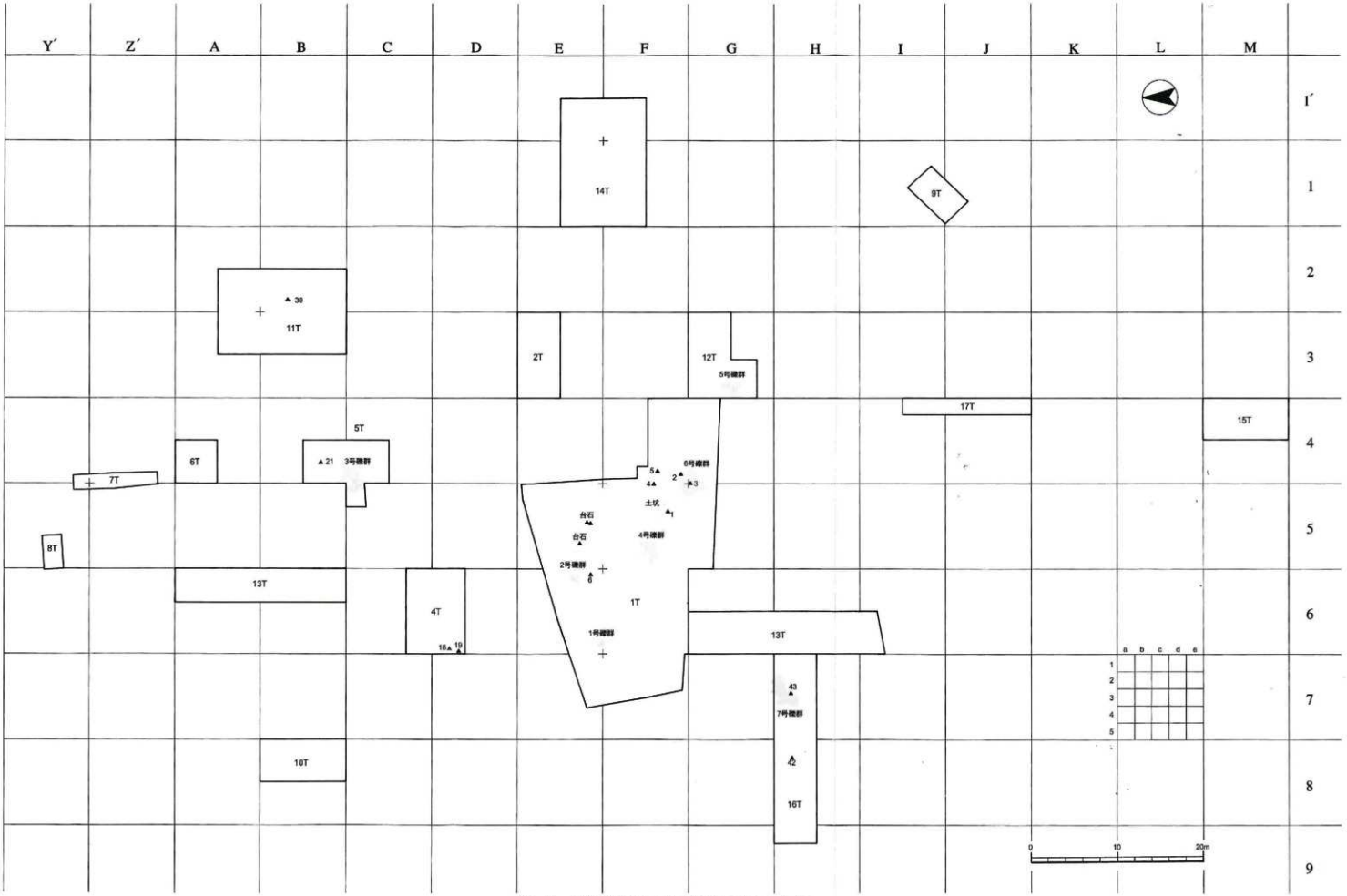
礫群は，１トレンチの６号礫群と16トレンチの７号礫群が検出された。遺物は，１トレンチと16トレンチで石器が出土した。



第6図　年度別調査区域図


Y´
Z´
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
1´
1
2
3
4
5
6
7
8
14T
9T
11T
2T
12T
17T
15T
6T
5T
7T
1T
8T
3T
4T
13T
10T
16T
調 査 層 位
縄文時代早期下位まで
縄文時代草創期下位まで
AT火山灰(X層)下位まで
種IV火山灰(XII層)上位まで
種III火山灰(XIV層)上位まで
XV層下位まで
下層確認
0
10
20m

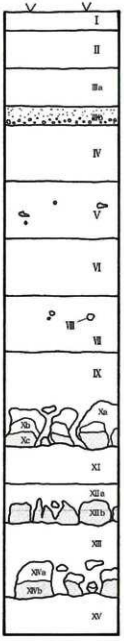
第7図　調査区域層位図



第８図　遺構配置図及び旧石器時代石器出土地点図

第2節　土　層

層序はトレンチにより若干の相違はあるが，基本的には第9図のとおりである。



第9図　標準層位模式図

I 層　**表土**　耕作土

II 層　**黒褐色砂質土層**　パサパサしている。無遺物層である。

IIIa層　**暗赤褐色火山灰層**（アカホヤ火山灰）　鬼界カルデラ起源で約6,300年前とされる。(1)

IIIb層　**黄橙色層**（幸屋火砕流）　5～10mmのパミスを確認できる。

IV 層　**茶褐色土層**　暗褐色を呈し，パサパサする部分もある。

縄文時代早期の包含層

V 層　**明褐色粘質土層**　層中に5～10mmの黄白色粒子が観察される。サツマ火山灰に比定される。

VI 層　**暗褐色粘質土層**　層厚が約20cmで隆帯文土器が出土する。

縄文時代草創期の包含層

VII 層　**淡褐色粘質土層**（ソフトローム）

VIII 層　**青灰色スコリア**　微粒で硬く締まる。火山噴出物と思われが起源は不明。5mm程度でVII層中にまれに観察される。

IX 層　**暗褐色強粘質土層**（ハードローム）暗赤褐色を呈する。

旧石器時代の包含層（Ⅲ文化層）

Xa層　**明黄色火山灰層**（ＡＴ火山灰）　姶良カルデラの噴出物で細粒。

Xb層　**明黄色層**（入戸火砕流）　下部は，粗粒軽石と砂礫・結晶が多いが，上部になるにつれて細粒の火山灰となる。

Xc層　**黄橙色層**（大隅降下軽石）　軽石層で全体的にベトベトする。

XI 層　**暗褐色強粘質土層**　粘性が強く軟質である。

旧石器時代の包含層（Ⅱ文化層）

XIIa層　**黄褐色火山灰層**（種IV火山灰）　やや不明瞭である。硬く締まるが，削るとサラサラする。30,000年前の噴出物とされる。(2)

XIIb層　**青灰色火山灰層**（種IV火山灰）

XIII 層　**淡褐色粘質土層**（ハードローム）　硬く締まるが，削るとサラサラする。**旧石器時代の包含層（Ⅰ文化層）**

XIVa層　**明黄橙色火山灰層**（種Ⅲ火山灰）　明瞭な堆積で，ブロック状に確認される。38,000年前の噴出物とされる。(2)

XIVb層　**暗青灰色火山灰層**（種Ⅲ火山灰）　ブロックでまれに観察される。

XV 層　**暗赤褐色強粘質土層**

横峯C遺跡の土層は，平成４年度に行われた緊急発掘調査で縄文時代早期の調査を終了しているため，調査されたトレンチの殆どがⅣ層までを消失している。但し，６・７・12トレンチを含む遺跡の周辺で，僅かではあるが縄文時代早期の遺物包含層が確認できる。

本遺跡の調査にあたっては，５枚の火山堆積物が鍵層となった。トレンチ毎に概要を記述する。

１トレンチ

旧地形は東から西へと緩やかに傾斜し，南北にはほぼ平坦である。Ⅴ層から確認され，各層とも20～30cmの厚さで堆積している。Ⅴ層は縄文時代草創期の包含層で明褐色を呈するが，黄白色の火山噴出物が部分的に点在する。Ⅶ層中に数点のⅧ層（青灰色スコリア）が確認される。色調によりＸ層を４層に区分できるところもある。Ⅻ層の種Ⅳ火山灰は上層が黄灰色と下層が青灰色に２分層される。このトレンチでは，旧石器時代の文化層が３時期発見された。小グリッドでⅩⅤ層まで確認した。

２トレンチ

全体的にほぼフラットな地形であるが，西に向かって僅かに傾斜する。Ⅴ層に黄白色火山灰が少量と，Ⅶ層中には数点のⅧ層（青灰色スコリア）が観察される。Ⅻ層まで掘り下げた。

３トレンチ

地表でⅤ層の黄白色火山灰が数点確認される。縄文時代草創期の遺構・遺物はこの直下で出土した。草創期の範囲は掘り下げずに，南側を部分的にⅩⅣ層まで確認した。旧地形は，緩やかに北へ傾斜している。

４トレンチ

各層の堆積は，ほぼ平坦である。Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅺ層で遺物が出土した。Ⅻ層は２層に区分できる部分もある。

５トレンチ

トレンチ西端の地表面に，隆帯文土器の小片が観察される。Ⅺ層で遺構・遺物が確認される。Ⅶ層直上まで掘り下げた。

６トレンチ

東西にはほぼ平坦であるが，南北方向では緩やかな傾斜である。Ⅷ層の青灰色スコリアが数点確認される。Ｘ層の堆積状況は良好でなく，帯が途切れる部分がある。この層から下位の火山灰層は，比較的薄い。

７トレンチ

Ⅰ層～Ⅴ層まで確認される。旧地形は，南から北方向へ急傾斜で下っていることから，北部分は谷であると考えられる。Ⅲ層の堆積は10cm程度と薄く，分層も困難である。トレンチ中央から北方向は，埋土が１ｍ以上で，その下層はⅡ層～Ⅳ層が混在する。

８トレンチ

谷部分と思われ埋められている。地表から約２ｍまで掘り下げたが，旧地形は確認されなかった。

９トレンチ

殆どが横転を受けていて，土層は著しく乱れている。地表から3.3mまで掘り下げたところで，礫層が確認される。

10トレンチ

ほぼ平坦に堆積する。撹乱層の下にⅢ層の下部が一部残存する。Ⅴ層とⅥ層は分層が困難で，特にⅤ層の堆積状況が悪い。

11トレンチ

トレンチの東端はX層まで削平され，中央部から西では，次第に傾斜が急になっている。これ以上東側は更に削平を受けている。AT火山灰を挟む茶褐色ローム層の粘性が強い。

12トレンチ

東端にⅡ層が確認されるが不規則であり，樹痕と思われる。Ⅴ層は比較的薄く，黄白色火山灰が観察される。Ⅸ層以下の層は不規則で，X層が縦位に観察される部分もある。

13トレンチ

Ⅰ・Ⅱ層は削平されており，撹乱層が厚く覆っている。Ⅲ層は僅かに観察される。Ⅴ層からⅦ層は分層が困難で，特にⅤ層はブロック状に堆積され，層中に黒色の微粒子が観察される。X層・Ⅶ層・XIV層の各火山灰も不規則に堆積する。地形は，ほぼ平坦である。

14トレンチ

Ⅳ層が残存し，遺構・遺物が確認される。XI層はやや軟質で，粘性がごく強い。XII層は削るとサラサラする。

15トレンチ

地形はほぼ平坦で，堆積状況も安定している。トレンチ南端は，谷へと傾斜する。

16トレンチ

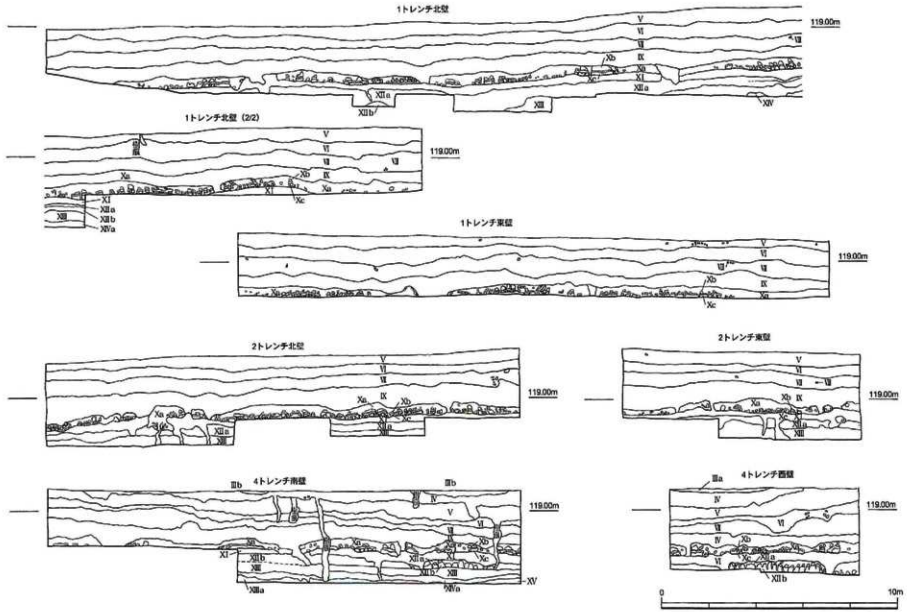
厚い撹乱層の下に僅かにⅢ層が確認される。Ⅴ層からⅦ層までは混在しており分層は困難である。X層の途切れる部分についてはⅨ層とXI層の境が不明瞭である。

17トレンチ

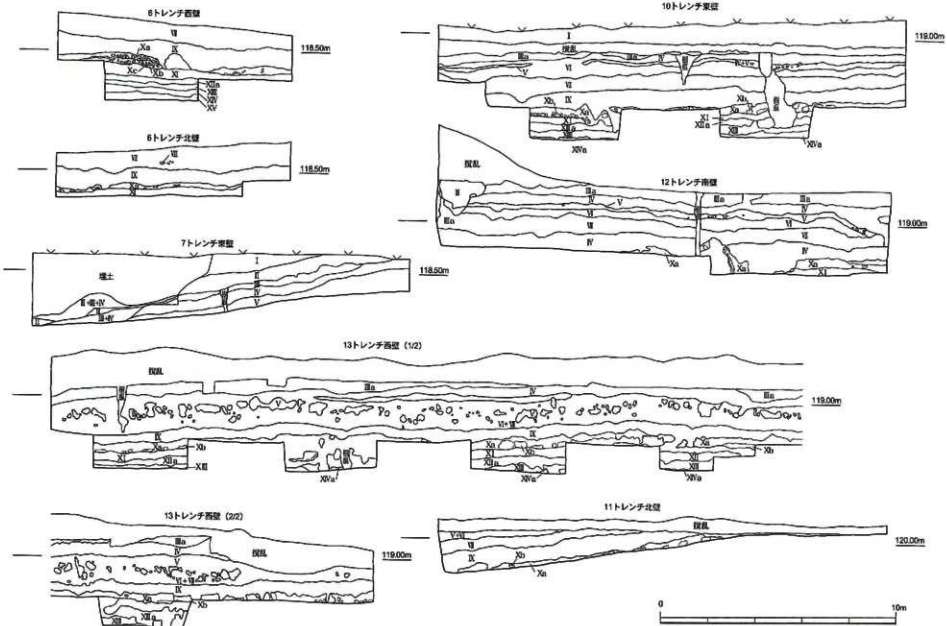
撹乱層の下にⅢ層から確認される。いずれの層も不規則である。Ⅲ層には上部の5㎜～10㎜の軽石を含む層の下に青白色砂粒を含み堆積する部分も観察される。旧地形の傾斜は，北から南方向へ，東から西方向へといずれも下っている。

［参考文献］

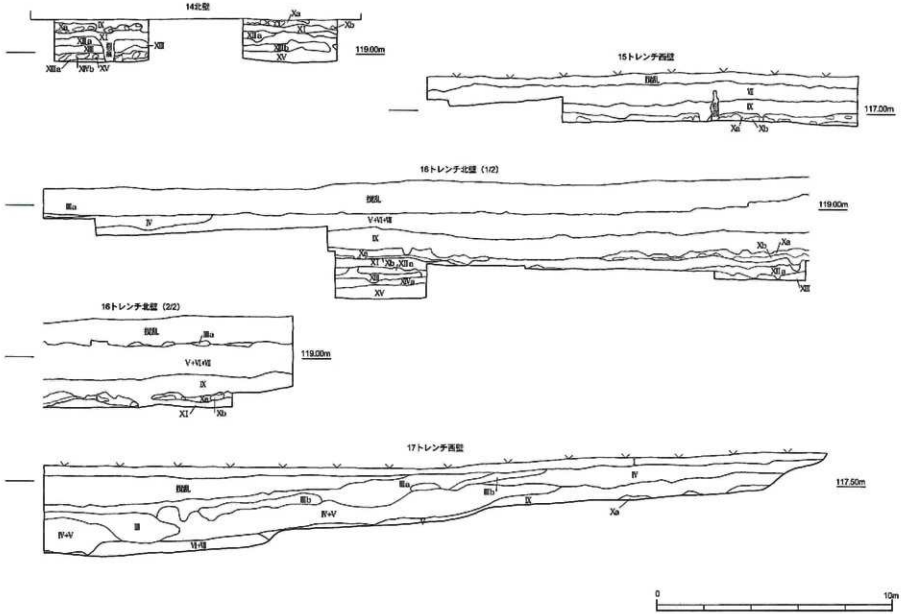
(1)南種子町教育委員会「横峯遺跡」　南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)　1993
第3章　南種子町横峯C遺跡の火山噴出物（成尾英仁）
(2)種子島に分布する後期更新世テフラ　第四紀研究　第33巻第2号　1994　奥野充・小林哲夫


1トレンチ北壁
119.00m
1トレンチ北壁 (2/2)
119.00m
1トレンチ東壁
119.00m
2トレンチ北壁
119.00m
2トレンチ東壁
119.00m
4トレンチ南壁
119.00m
4トレンチ西壁
119.00m
0
10m

第10図　土層断面図(1)


8トレンチ西壁
118.50m
6トレンチ北壁
118.50m
7トレンチ東壁
盛土
118.50m
10トレンチ東壁
119.00m
12トレンチ南壁
119.00m
13トレンチ西壁（1/2）
119.00m
13トレンチ西壁（2/2）
119.00m
11トレンチ北壁
120.00m
0
10m

第11図　土層断面図(2)


14北壁
119.00m
15トレンチ西壁
117.00m
16トレンチ北壁（1/2）
119.00m
16トレンチ北壁（2/2）
119.00m
17トレンチ西壁
117.50m
0
10m

第12図　土層断面図(3)

第Ⅳ章　各トレンチの状況及び遺構・遺物

1トレンチ（525㎡）

今回の調査では最も広い範囲のトレンチとなった。

調査手順は，平成4年度に検出された1号礫群と2号礫群の再検出から実施した。表層からＡＴ火山灰までは重機を使用して掘り下げ，それ以下については2m×2mの小グリッドを組み，作業員により千鳥に掘り下げた。礫群の検出された付近は調査範囲を拡張し，これにともなう同時期の石器を確認することとした。

このトレンチでは，縄文時代の遺物包含層は確認されなかったが，旧石器時代の文化層が，Ⅰ文化層からⅢ文化層までの3時期が確認された。遺構は，礫群4基と石器数点が確認された。

(1)　旧石器時代「Ⅰ文化層」

遺　構（第13図・第15図）

Ｅ6区では1号礫群と2号礫群，Ｆ5区で4号礫群が検出された。

1号礫群は，80cm×70cmの規模のものであったが，平成4年調査時に掘り込みの確認のため半分の礫を取り上げていた。炭化物のあり方から掘り込みに間違いないが，種子島における近年の調査で，噴礫現象が確認されていることから(1)，1号礫群の下層を半截して確認を試みた。断面は，約10cmを測る掘り込みの上部に炭化物を含む黒色層があり，その下部はこれによって汚染された層が確認される。掘り込みから下の層は，約10cmの淡褐色粘質土層をはさんでオレンジ色を呈する種Ⅲ火山灰がブロック状に堆積している。噴礫でないことは明確である。

2号礫群は，Ｅ6ｃ1区で検出された。砂岩角礫が約115cm×75cmの範囲によく集中し，数点が南と西方向へばらけた状態で検出された。炭化物による黒褐色土は，礫の集中部分とほぼ位置を同じくしている。礫は，約30cmの大型から2～3cmの小片までで構成されるが，拳大のものが多くを占める。検出面で約220個を数える。殆どが加熱による破砕と赤化が確認される。現地保存を考慮して掘り込みは確認しなかったが，存在するものと予想される。全体的に1号礫群と2号礫群は類似している。

4号礫群は，Ｆ5ｃ5区で検出された。主に3m×2mの範囲内に散在し，拳大から小片の砂岩角礫が少数で構成される。赤変した礫は見られるが，掘り込みと熱破砕礫は確認されない。礫の広がりとほぼ同位置に炭化物の粒子が広がる（以下図中の・はカーボンドットである）。

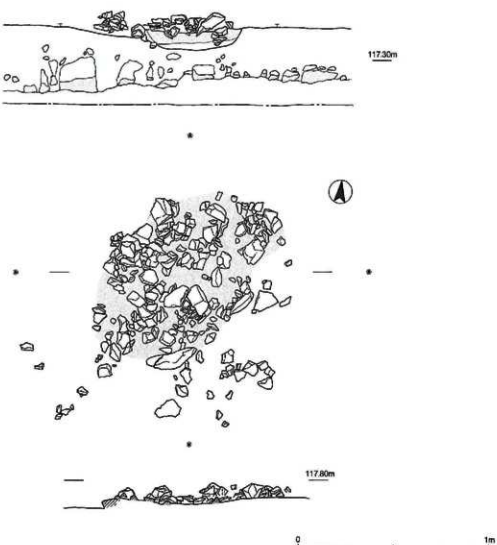
遺　物（第18図）

6は種Ⅳ下で出土したハンマーである。砂岩の円礫で，下から片一方の側縁にかけて打痕がある。

(2)　旧石器時代「Ⅱ文化層」

遺　構（第16図・第14図）

6号礫群は，Ｆ4とＧ5区の交点で検出された。加熱による赤変と破砕礫によるひび割れが観察される。3.8m×3.3mの範囲に，5cm前後で構成される砂岩礫が散在する。炭化物は，数点検出されただけであった。掘り込みは確認されない。



第13図　1トレンチ1号礫群・2号礫群

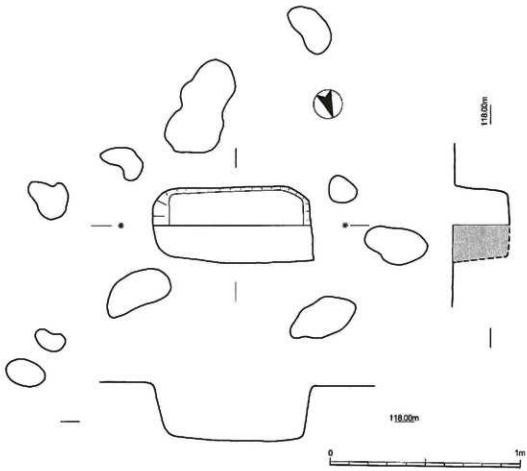
礫群の南東方向では，種Ⅳ火山灰直上で径40～50cmを測る砂岩製の台石が3点出土した。2点は接しているが，残る1点は約25mの距離をおいて北西に位置する。更にその周辺では無数の炭化物が，台石とほぼ同位置に，南東から北西方向で約30m×20mの範囲に確認される。また，台石にはさまれる中央部分には，きめ細かい淡いピンク色と白色を呈する部分が確認された。焼土と思われる。「火処」であったものと考える。

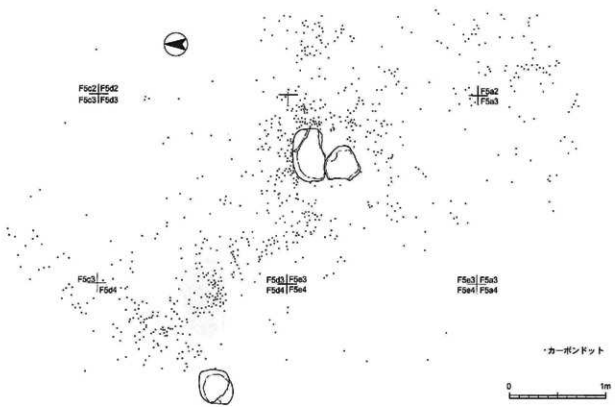
遺　物（第17図）

2と3はともに6号礫群の周辺のＡＴ下で出土した敲石である。やや不定形であるが，円礫を素材としている。2の一面は粗い敲打痕で凹凸が激しく，先端に細かい敲打痕がある。

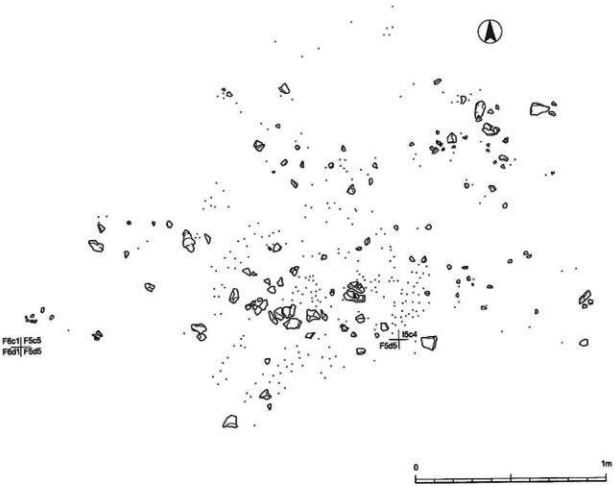
3は節理面で割れているが先端に敲打痕がある。

4は石英脈がはいる砂岩が，節理により割れて平面形がひし形の扁平な角礫が素材である。節理面を打面として，複数回の剥離を行っている。5が剥離されたフレークである。





第14図　1トレンチ　土坑及び火処遺構



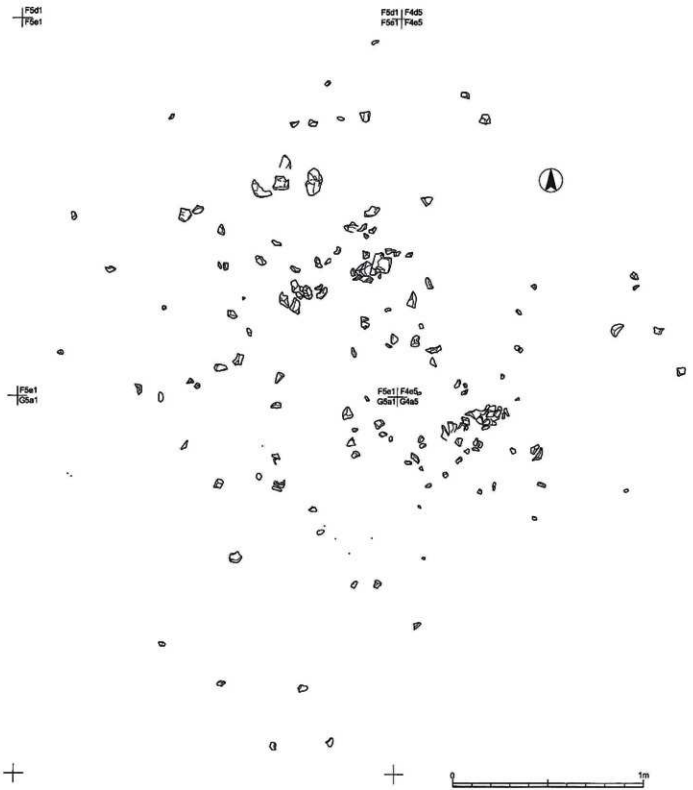
第15図　１トレンチ４号礫群

(3) 旧石器時代「Ⅲ文化層」

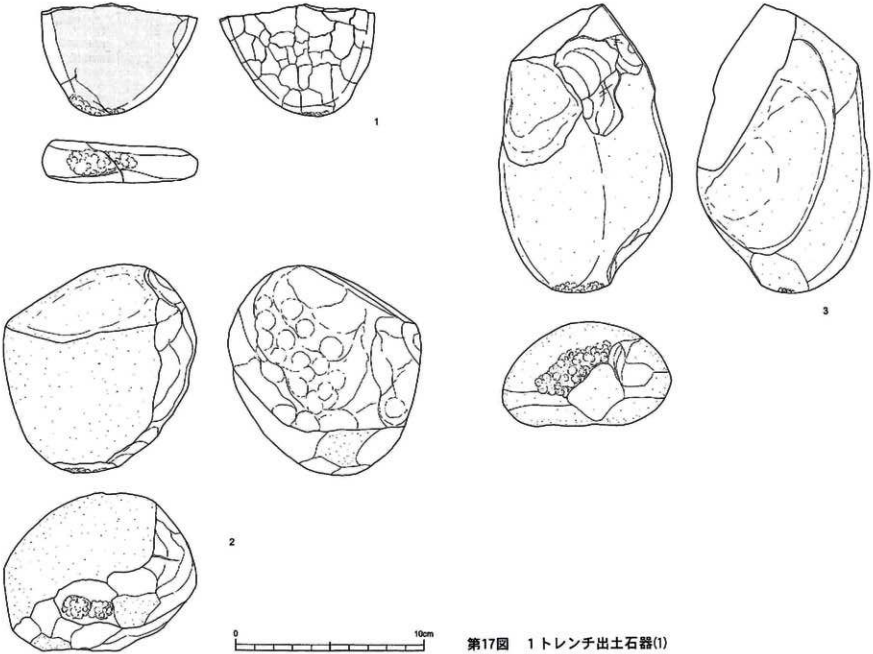
遺　構（第14図）

トレンチ南東端のＦ５ｄ1区で，Ｘ層にⅨ層を埋土とする約85cm×40cm×30cmを測る方形土坑と，その周囲にはこれを取り囲むようにピット状遺構が検出された。方形土坑の埋土は茶褐色を呈するソフトな粘質土で，分層はされなかった。縦方向に半截し，下部の確認を行った。断面は台形を呈し，底部に下がるに従ってややすぼまる。底面は約70cm×35cmでフラットである。遺物等の出土はなかった。土坑墓か貯蔵穴などの可能性はあるが，浅いため陥し穴としては考え難い。

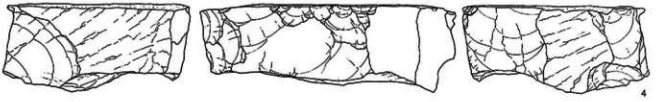
周辺のピット状遺構は，半截し断面確認を行ったが，数基については樹痕の可能性を持つものと思われた。

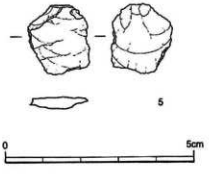


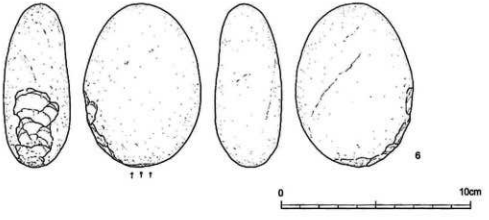
第16図　1トレンチ　6号礫群



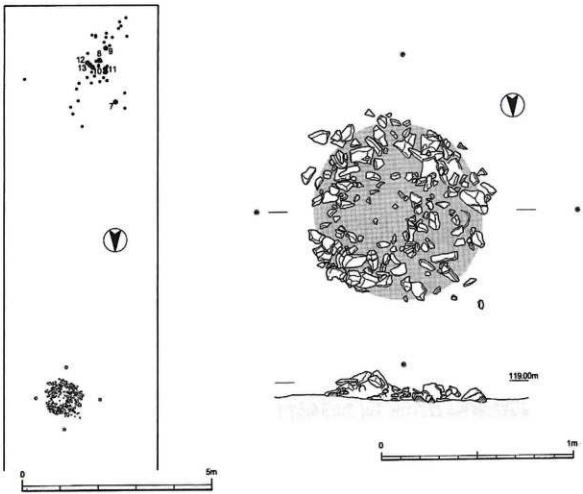
第17図　1トレンチ出土石器(1)







第18図　1トレンチ出土石器(2)



第19図　3トレンチ縄文時代草創期遺物出土状況及び集石

遺　物

1はＡＴ層直上で，土坑の横から出土した磨石・敲石である。円礫を素材として，片面に平坦面があり，平滑になっている。裏面は細かなヒビがはいり，全体に２次的な熱により赤化しひび割れしたものと考えられる。先端部には敲痕が観察される。

(1)成尾英仁・小林哲夫　1996　アカホヤ噴火時に発生した液状化による噴礫現象

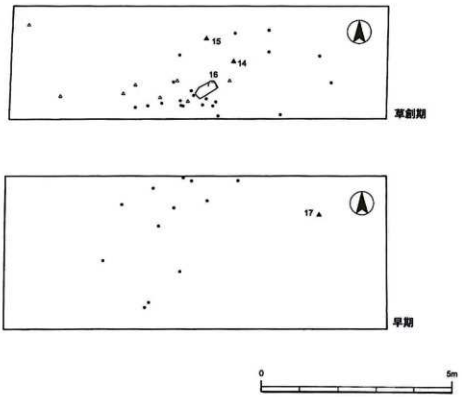
２トレンチ（50㎡）

このトレンチは，Ｅ3区に約50㎡（5m×10m）設定した。

ＡＴ火山灰から種Ⅲ火山灰までは，小グリッドを作業員により慎重に掘り下げた。

いずれの時代においても遺構・遺物の確認はされず，Ⅻ層において石英脈を有する砂岩礫などが数十点出土したのみであった。

Ⅻ層まで確認し，調査終了した。



第20図　4トレンチ縄文時代草創期・早期遺物出土状況

3トレンチ（80㎡）

4m×20mのトレンチをA・B6区に南北方向で設定した。地表面（Ⅳ層上面）から約20cmで縄文時代草創期の遺物包含層が確認された。ここでは，隆帯文土器と集石が検出された。

旧石器時代の調査については，南側部分を約4m×4mの範囲でⅩⅣ層上面まで掘り下げたが，Ⅻ層から数点の砂岩礫が出土しただけで，遺構・遺物は確認されなかった。

(1)　縄文時代「草創期」

遺　構（第19図）

トレンチの北側（A6区）において，表土から約20cm下位で集石が1基検出された。直径約100cmの範囲によくまとまり，拳大から小片の砂岩礫で構成される。中央部分の直径約20cm程度は，礫の空白部分がある。礫と同じ範囲で，炭化物による黒色土が観察される。堀り込みがあるものと予想される。

遺　物（第21図）

7～13は隆帯文土器である。胎土は細かく砂粒をあまり含まず脆い。外器面はナデ調整してあり，内器面については木ロ状の工具でナデてある。隆帯は貼り付けてそのうえを棒状のもので押圧して刻んでいる。ほぼすべてが同一個体と考えられる。13は外器面に縦方向に短沈線が施されるものと考えられる。

検出された集石と土器片は約9m離れているが，出土層位から同時期のものと思われる。

4トレンチ（70㎡）

平成８年度は，Ｄ６区に４ｍ×10mで設定した。表土直下で縄文時代早期の遺物が数点出土した。旧石器時代の調査では，種Ⅳ火山灰直上のⅡ文化層（Ⅺ層）の遺物が出土した。

平成９年度は，平成８年度のトレンチの北側に隣接して，３ｍ×10mの範囲で拡張した。ここでは縄文時代草創期の遺物が出土した。

(1) 旧石器時代「Ⅱ文化層」

旧石器時代の調査は，平成８年度に南側の４ｍ×10mを千鳥で掘り下げた。種Ⅳ火山灰直上（Ⅺ層）から，敲石とほぼ長方体を呈する台石が出土した。その他に数点の砂岩礫も確認された。

遺　物（図版３・第22図）

18・19は種Ⅳ直上からセットで出土した。18は敲石で，楕円形の円礫を素材として，両端に敲打痕がある。19は台石とした。実測図左側を上にして検出しており，これが上面（作業面）と判断される。下面には一方向からの剥離がなされているが，石材形状から突出した部分を打ち欠いて，石のすわりを良くしたものである。両端部は明確なバブルは観察されないが，折り取られた可能性もある。

(2) 旧石器時代「細石器文化層」

遺　物（第21図）

17は頁岩の細石刃である。石核は出土していないが同一方向からの連続した剥離と形状から細石刃とした。

(3) 縄文時代「草創期」

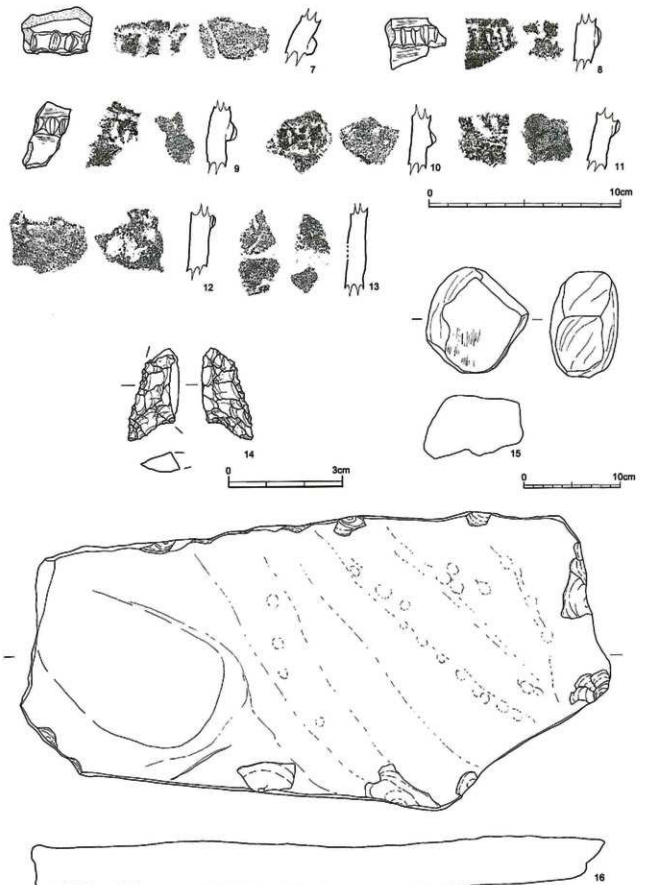
遺　物（第21図）

15・16は草創期の遺物で，セットで出土した。15は磨石で，一面に平滑面があり擦痕も観察できる。石材は砂岩で側面には節理痕があり，もともと円礫を素材としたものとは異なる。16は石皿である。石材は砂岩で，周縁調整を施し形を整えている。全体に凹凸があるが，凸部は磨られて平滑になっており，特に幅狭の図面の左側の部分はくぼみがあり，ここは全体に磨られており，石皿としての機能が集約されたものと考えられる。

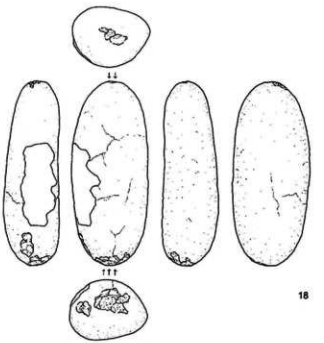
(4) 縄文時代「早期」

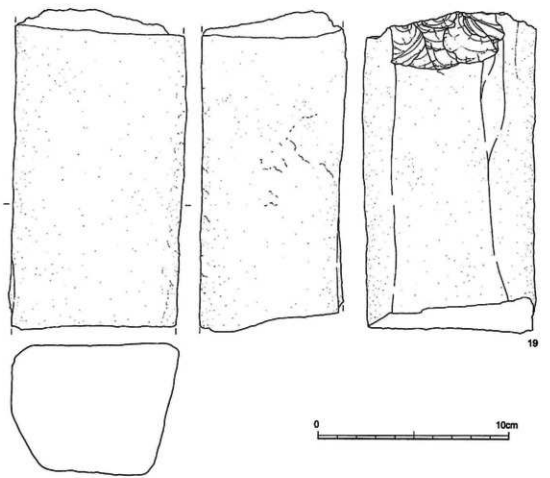
遺　物（第21図）

14は早期層から出土した石鏃である。灰色チャート製で半分を欠く。



第21図　3トレンチ出土隆帯文土器と4トレンチ出土石器(1)





第22図　4トレンチ出土石器(2)

5トレンチ（55㎡）

当初，Ｂ４区に５ｍ×５ｍで設定したが，Ⅺ層のトレンチ南端において多量の礫とカーボンが確認されたため，調査範囲をＣ４区とＣ５区まで拡張した。Ｃ５区の地表面では，３トレンチと同一個体と思われる隆帯文土器片が少量確認された。ＡＴ火山灰から約15cm下位のⅪ層で，礫群と礫器が検出された。

(1) 旧石器時代「Ⅱ文化層」

遺　構（第23図）

Ｃ５ａ5区付近で３号礫群が検出された。礫群は西側に主体部を持ち，この部分はまとまりがよく10cm前後の砂岩礫が，約150cmの範囲に集中する。この中心部には直径約30cmの礫のない空間がある。３トレンチの集石にも同様な状況が確認される。礫は，ここから北東部へばらけた状態で位置しており，約５cm～10cmの小片が多くを占めているため，廃棄されたものと考えられる。カーボンや焼礫及び熱破砕礫は少量確認される。掘り込みについては不明である。

遺　物（第24図）

21はＡＴ下層から出土した砂岩製の礫器である。裏面は節理で割れたもので，表面の最も大きい剥離はネガティブ面で，残核を素材とした可能性がある。基部は２辺に整形剥離がみられ，表裏より剥離して刃部を形成する。

(2) 縄文時代「早期」

遺　物（第24図）

20は，早期の遺物である。頁岩製の剥片である。

6トレンチ（25㎡）

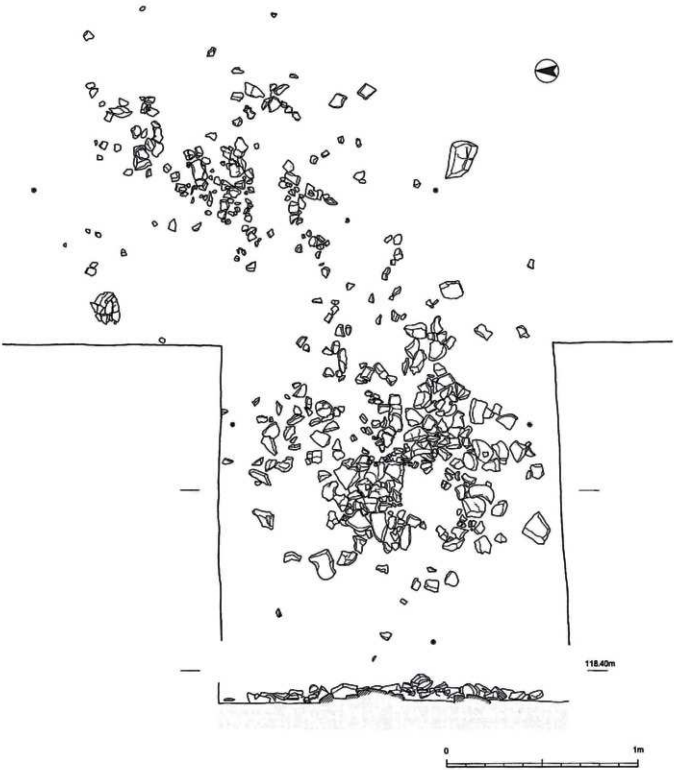
Ａ４区に５ｍ×５ｍで設定した。

地表面にごく近いところで縄文時代早期の土器片数点と石槍が出土した。地層の状況から縄文時代早期の落ち込み遺物と思われる。XIV層（種Ⅲ火山灰）の下層まで掘り下げたが砂岩礫のほかに遺構・遺物の確認はされなかった。

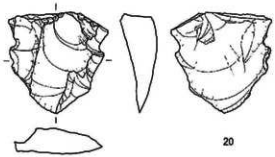
(1) 縄文時代「早期」

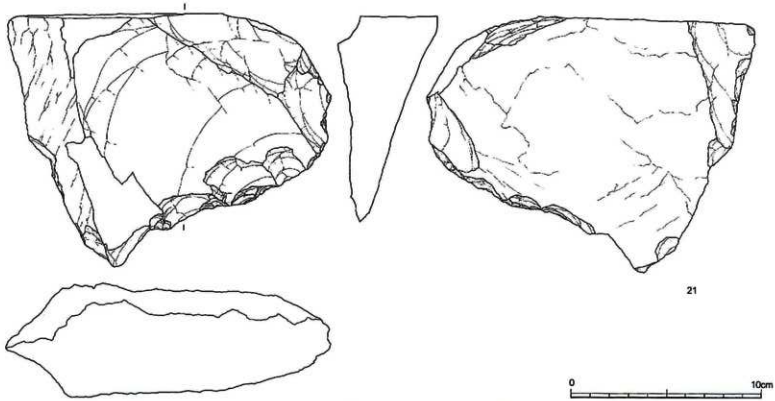
遺　物（第25図）

22～24は早期の土器で，22・23は貝殻条痕が条線状に施されており，苦浜式土器と判断される。24は，波状の貝殻条痕が条線状に施されており，やはり苦浜式土器であろう。27は，頁岩の槍先で，打点を石核の周縁で転移させながら剥ぎ取った扁平な剥片を素材としている。特に先端部と基部を整形しており，研磨は見られない。

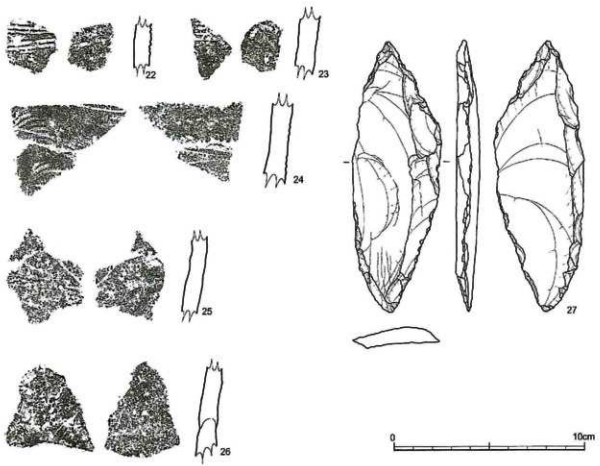


第23図　5トレンチ　3号礫群





第24図　5トレンチ出土石器



第25図　6トレンチ・7トレンチ出土遺物

7トレンチ（17㎡）

谷頭に近い部分（Z′4・5区）に，旧地形確認のため南北方向に約2m×10mで設定した。Ⅳ層（縄文時代早期）で縄文時代早期の遺物包含層が確認された。遺物は南側より主に出土している。

地形は，北に向かって徐々に傾斜を強めながら下っている。

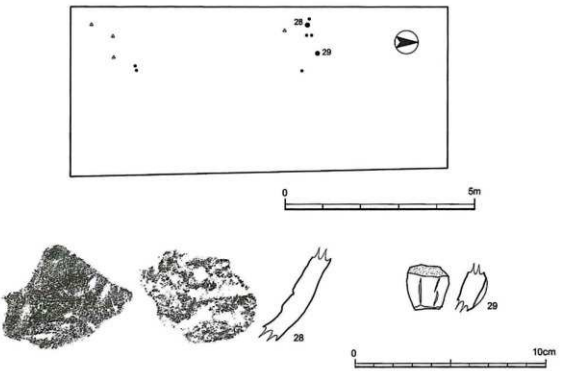
(1) 縄文時代「早期」

遺　物

25は外器面が貝殻条痕，内器面がナデ調整されている。26は外器面が工具でナデられ凹凸が激しく，内器面がナデ調整されている。縄文時代早期の遺物である。

8トレンチ（9㎡）

埋められた旧谷部を確認するため，7トレンチの北西（Y′5区）に設定した。重機を使用し地表面から約2mまで掘り下げたが，旧地形は確認されなかった。造成による客土層が非常に厚く，旧地表面までは数mの深さがあると予想される。北側は，この谷が現状より深く入っており，この谷より北は急傾斜で高くなっているため遺跡の北限と考えられる。



第26図　10トレンチ縄文時代草創期遺物出土状況及び出土遺物

9トレンチ（29㎡）

1トレンチ南東約50m付近のＩ１区に設定した。X層から下位の層は横転を受けていると思われ，著しく乱れていた。そこで，下層確認のため重機を使用し約3.3mまで掘り下げたところで，西之表テフラの下に粘土層があり，更に礫層に至った。遺構・遺物は確認されなかった。

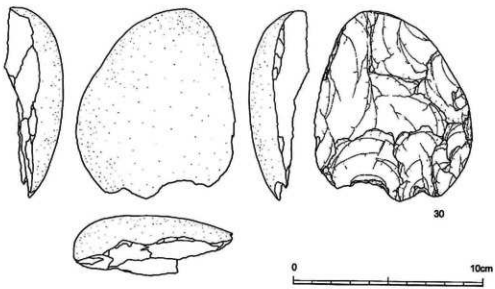
10トレンチ（50㎡）

Ｂ８区に５m×10mで設定した。縄文時代草創期の土器片が少量出土した。XI層から XII層までは，小グリッドを千鳥に掘り下げたが，旧石器時代の遺構・遺物は確認されなかった。

(1)　縄文時代「草創期」

遺　物（第26図）

28は無文の底部付近の破片である。粘土の積み上げ痕が残る。29は砂礫を含まない軟質の土器片で，隆帯文土器である。隆帯部分は削られており，刻目の痕跡が観察できる。



第27図　11トレンチ出土石器

11トレンチ（150㎡）

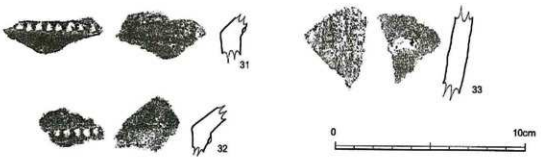
Ｂ２区に５ｍ×10mで設定した。東側は，Ⅸ層まで，西側はⅣ層（縄文時代草創期相当層）まで削平を受けていたため，Ⅻ層から小グリッドを人力により掘り下げた。

トレンチの中央部において，Ⅻ層（種Ⅳ火山灰）直上で硬質頁岩製の刃器が出土した。そこで，この石器を中心として調査範囲10m×15mまで拡張したが，数点の礫は出土するものの遺構・遺物の確認はされなかった。このトレンチより東側については，Ⅻ層・Ⅻ層も削平され，崖となっており遺跡は広がらない。

(1)　旧石器時代「Ⅱ文化層」

遺　物（第27図）

30は頁岩製の礫器である。礫皮面が一面に残り，剥離面はネガティブで，残核を転用して石器としたものであろう。剥片を剥ぎ取った周縁からの剥離のほかに，周縁部のエッジを除去するため整形したと考えられる剥離が行われており，刃部である凹部に細かな剥離がみられる。



第28図　12トレンチ出土土器

12トレンチ（63㎡）

Ｇ３区に設定した。ここでは，縄文時代早期の遺物が数点出土した。

旧石器時代の調査では，トレンチの南壁部のＸ層直下において，焼礫が集中して確認されたため，南方向へトレンチを拡張した。

⑴　旧石器時代「Ⅱ文化層」

遺　構（第29図）

Ｇ３ｃ５区で５号礫群が検出された。全体的に礫はまとまりがなく，約25cmの大型礫２個を最北東にして小片の礫が南西方向に散在している。大型礫は加熱による赤変と破砕によるひび割れが著しい。炭化物も確認されるが，礫の広がりと位置がややずれている。掘り込みは確認されない。礫の一部は西壁に残存する。

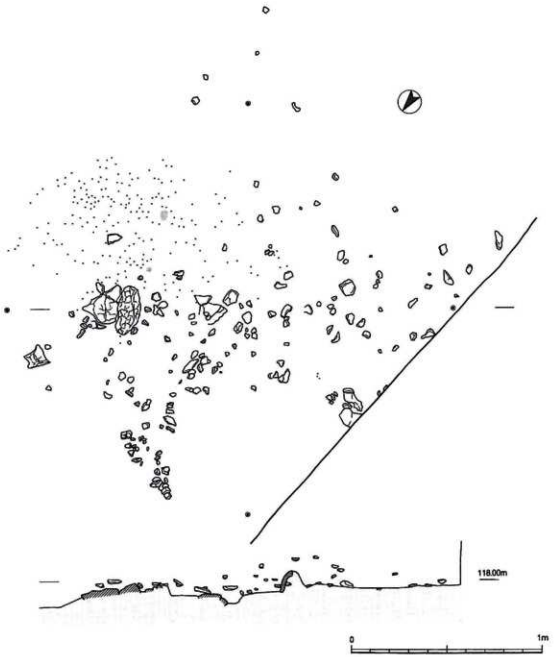
⑵　縄文時代「早期」

遺　物（第28図）

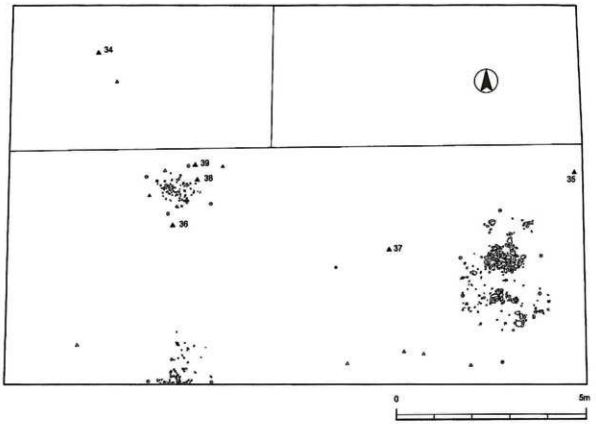
31・32は，胴部が真っすぐ立ち上がり，口縁部が外側に折り曲がる器形の頸部にあたり，その外器面は貝殻の肋部分で連続刺突を施している。32については，刺突部分が微隆起している。塞ノ神式にあたる。33は外器面が下から上に工具ナデされており，砂粒の移動が顕著である。内器面はナデられている。

13トレンチ（113㎡）

１トレンチから南方向にＧ６区からＩ６区にわたり，約５ｍ×23ｍで設定した。Ⅻ層上面まで掘り下げた。少量の礫以外に遺構・遺物は確認されなかった。



第29図　12トレンチ　5号礫群



第30図　14トレンチ縄文時代早期遺物出土状況

14トレンチ（150㎡）

調査範囲の最東部に10m×15mのトレンチを設定した。東側は，南より回り込む谷に下っていく。ここでは，Ⅳ層（縄文時代早期）から集石３基と石斧・石鏃あるいは土器片が数点出土した。トレンチ北側約57㎡を縄文時代草創期相当層まで調査し，更にその東部約30㎡をⅩⅤ層まで掘り下げたが，遺構・遺物は確認されなかった。

(1)　縄文時代「早期」

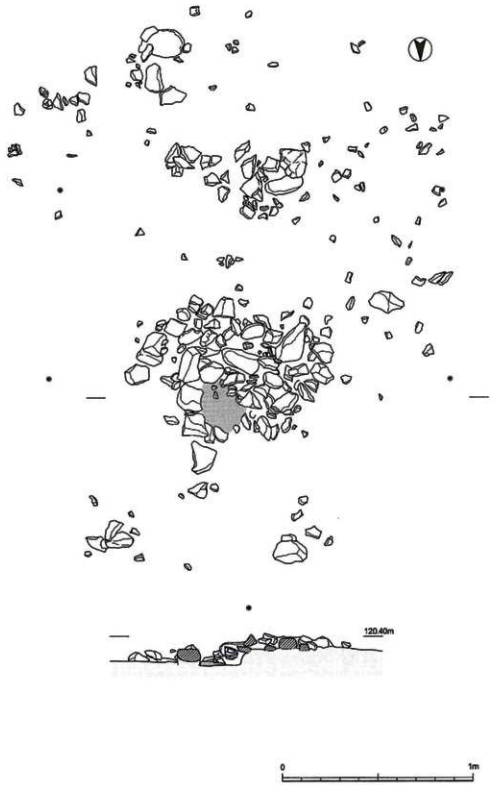
遺　構（第31図・第32図）

１号集石は，トレンチ東部のＦ１′ｂ4区で検出された。検出した砂岩礫は，約110cm×80cmによくまとまってはいるが，周囲に数点の集まりを持ち散在する。礫は約20cmの大型から小片で構成されており，熱破砕が見られる。集石の中央よりやや北よりでは礫の空白部分があり，炭化物を含む黒褐色土が観察される。掘り込みがあると思われる。

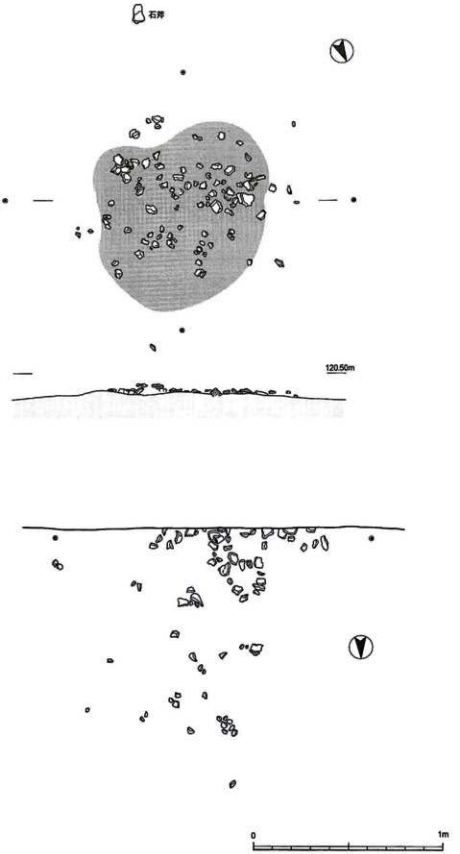
２号集石は，Ｆ１ａ3区で検出された。ほぼ５cm前後の小礫で構成され，数も比較的に少ない。約100cmの円形の範囲内にばらけており，同様な範囲で赤褐色を呈する焼土が確認される。礫は赤変している掘り込みがあると思われる。

３号集石は，トレンチ南壁のＦ１ｃ3区で検出した。礫の約半分は未調査である。礫は，約100cmの範囲に集中すると思われる。検出された部分では，北方向へ数点がばらけている。

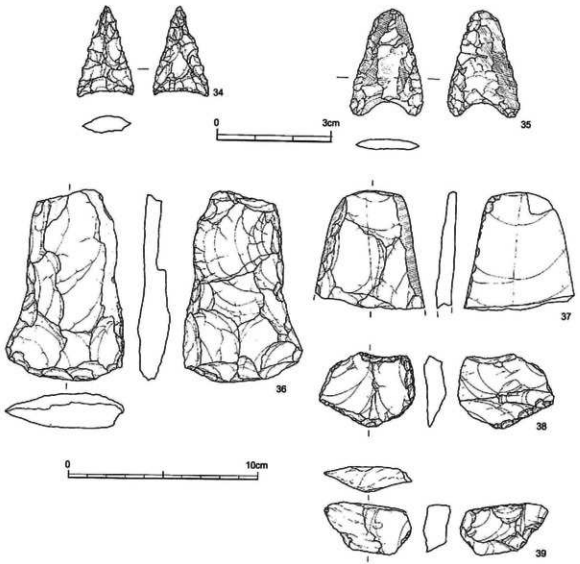
検出された集石は，現地保存をするため掘り込みの確認はしなかった。



第31図　14トレンチ　縄文時代早期１号集石



第32図　14トレンチ　縄文時代早期２号集石及び３号集石



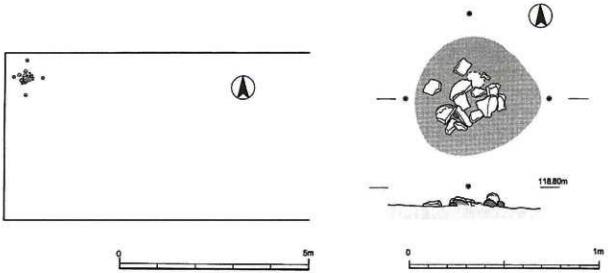
第33図　14トレンチ出土石器

遺　物（第33図）

34はチャートの石鏃である。35は頁岩製の石鏃で，両面とも研磨してある。先端の尖りがにぶく，未製品の可能性がある。36は頁岩の石斧で，風化が著しい。37は泥岩製の石斧で両側縁が研磨してある。節理で割れて，割れ面に細かい剥離があり，２次的に使用された可能性がある。38は灰白色のハリ質安山岩のスクレーパーである。39も石材は灰白色のハリ質安山岩の石核で，２面に礫皮面を残す。最終打面はその短い礫皮面であるが，打点を転移しながら剥離したことが伺われる。

15トレンチ（50㎡）

調査地区最南端のＭ４区に５ｍ×10ｍで設定した。１トレンチのある台地とは，谷を隔てて別の台地にあたる。トレンチの南側でⅢ層が僅かに確認されたため，縄文時代早期相当層の調査から開始し，ⅩⅣ層上面まで掘り下げたが遺構・遺物は確認されなかった。



第34図　16トレンチ縄文時代早期４号集石

16トレンチ（111㎡）

13トレンチから西方向へ，西への遺跡の広がりを確認するため，約５ｍ×22mで設定した。

縄文時代早期の集石１基と遺物が少量確認された。また，Ⅺ層（旧石器時代Ⅱ文化層）で礫群１基と石器が２点確認された。Ⅴ層からⅦ層までは分層が困難であった。

(1)　旧石器時代「Ⅱ文化層」

遺　構（第35図）

Ｈ７ａ2区で，トレンチの北壁に接して検出された。砂岩の小礫が主体で構成され，全体が大きくばらけている。加熱による赤化も少量観察される。カーボンは少ないが，壁側に集中するため，礫群の中心は未調査部分の可能性もある。掘り込みは確認されない。

遺　物（第36図）

42は硬質の頁岩で，黒と白がまだらの円礫を素材としている。現在でも海岸で，数は少ないが採集できる。丸みを帯びた面に擦痕がみられる。43の石材は変成砂岩で，石英脈が入る。不規則なバルブを形成し，２次加工はみられない。単独出土である。

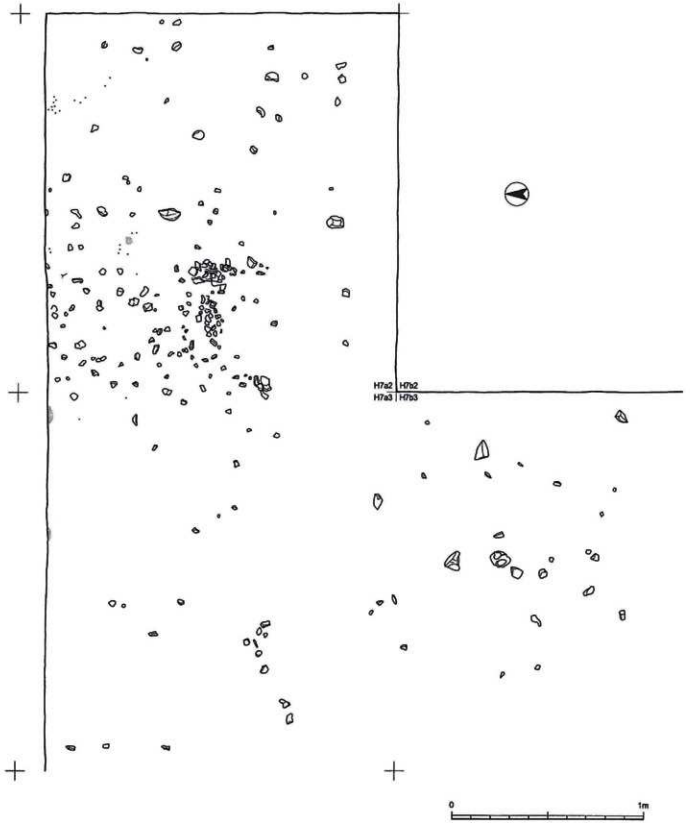
(2)　縄文時代「早期」

遺　構（第34図）

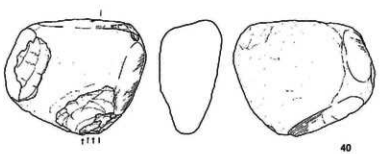
Ｈ９ａ1区に小規模の４号集石が検出された。10cm前後の礫が約40cmの円形にまとまっている。検出された下部にも礫が確認される。この集石は，加熱による赤変・破砕は全く観察されない。また，カーボンも検出されないが，礫の周囲約70cm×60cmがやや暗灰色を呈する。掘り込みがあると思われる。

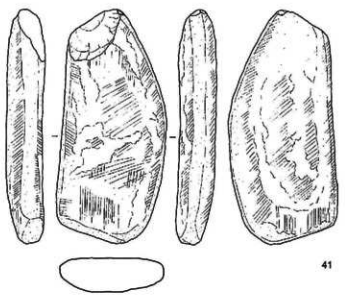
遺　物（第36図）

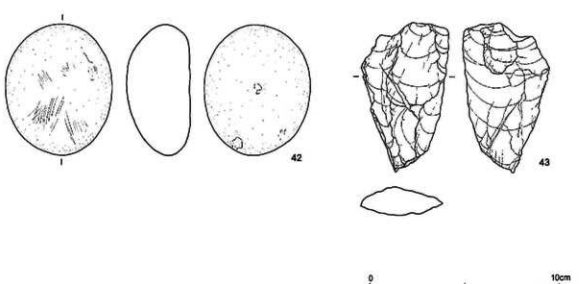
40は砂岩の円礫を素材として，敲打痕と３面の研磨面がある。敲打痕側から衝撃によって剥離している。41は砂岩の磨石で，全面に擦痕がみられる。



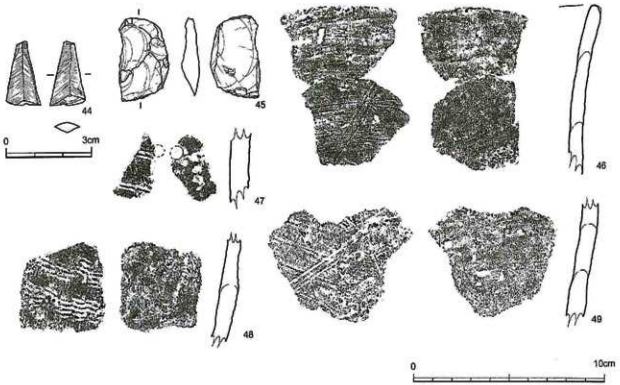
第35図　16トレンチ　7号礫群







第36図　16トレンチ出土石器



第37図　横峯C遺跡表採遺物

17トレンチ（30㎡）

1トレンチと15トレンチに挟まれた旧地形の谷部に，地形の把握を目的として延長約15mで設定した。

調査の結果，土層は南方向へ緩やかに傾斜し，西方向へはやや急傾斜を持って下っている。また，土層の堆積は悪く，分層も困難であった。トレンチの南端で約1.9mの深さを測り，検出面ではAT火山灰がブロック状に確認された。遺構・遺物は確認されなかった。

表採遺物（第37図）

44は頁岩製の磨製石鏃で，上下端を欠いている。45はチャート製のスクレーパーである。46は円筒形の器形で，口縁部に刻目を施し，調整は外器面が条痕で内器面がていねいにナデられている。外器面に条痕を地文として，斜め方向に条痕が上書きされている。47・48はともに貝殻条痕が条線状に施されるもので，47は直線に48は波状である。47は穿孔跡がある。ともに苦浜式土器である。49は木口状の工具の条痕に，さらにX字状に条痕が施される。

第3表　土器観察表

挿図番号	遺物番号	トレンチ番号	胎土					焼成	色調		調整・文様		備考
			石英	長石	角閃石	金雲母	砂礫		外	内	外器面	内器面	
21	7	3	○	○	−	−	△	△	赤褐色	赤褐色	ナデ・隆帯・刻み	工具ナデ	
〃	8	〃	○	○	−	−	△	△	赤褐色	赤褐色	ナデ・隆帯・刻み	工具ナデ	
〃	9	〃	○	○	−	−	△	△	茶褐色	茶褐色	ナデ・隆帯・刻み	工具ナデ	
〃	10	〃	○	○	−	−	△	△	茶褐色	茶褐色	ナデ・隆帯・刻み	工具ナデ	
〃	11	〃	○	○	−	−	△	△	茶褐色	茶褐色	ナデ・隆帯・刻み	工具ナデ	
〃	12	〃	○	○	−	−	△	△	茶褐色	茶褐色	工具ナデ・隆帯・刻み	工具ナデ	
〃	13	〃	○	○	−	−	△	△	茶褐色	茶褐色	工具ナデ・沈線	工具ナデ	
25	22	6	○	○	−	−	○	○	茶色	黒茶褐色	ナデ・貝殻条線	工具ナデ	苦浜式
〃	23	〃	○	○	−	−	○	○	赤褐色	茶色	ナデ・貝殻条線	工具ナデ	苦浜式
〃	24	〃	○	○	−	−	○	○	灰褐色		ナデ・貝殻条線	工具ナデ	苦浜式
〃	25	7	○	○	−	−	○	○	暗赤褐色		ナデ・貝殻条線	工具ナデ	
〃	26	〃	○	○	−	−	○	○	黄褐色	黒褐色	工具ナデ	ナデ	
26	28	10	◎	○	△	−	◎	○	暗茶褐色	茶色	ナデ	ナデ	
〃	29	〃	○	○	−	−	△	△	黄褐色		ナデ・隆帯・刻み	不明	
28	31	12	○	○	−	−	○	○	褐色	暗褐色	ナデ・連続刺突	ナデ・工具ナデ	塞之神式
〃	32	〃	○	○	−	−	○	○	茶褐色		ナデ・連続刺突	ナデ・工具ナデ	塞之神式
〃	33	〃	○	○	−	−	○	○	茶褐色		工具ナデ	ナデ	
37	46	表採	○	○	−	−	◎	○	暗茶褐色		刻目・条痕	工具ナデ	
〃	47	〃	○	○	−	−	◎	○	淡褐色		ナデ・貝殻条線	工具ナデ	穿孔・苦浜式
〃	48	〃	○	○	−	−	◎	○	灰褐色	黒褐色	ナデ・貝殻条線	工具ナデ	苦浜式
〃	49	〃	○	○	−	−	◎	○	茶色	黒褐色	工具ナデ・条痕	工具ナデ	

第4表　石器計測表

挿図	番号	器種	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	トレンチ	注記番号
第17図	1	磨石・敲石	砂岩	5.89	8.21	2.18	130.0	1	YCⅢ1
	2	敲石	〃	10.47	10.19	8.21	950.0	1	YCⅣ12
	3	敲石	〃	14.99	9.05	5.50	935.0	1	YCⅣ13
第18図	4	石核	変成砂岩	10.00	13.60	4.60	644.4	1	YCⅣ3
	5	ﾌﾚｰｸ	〃	1.80	1.60	0.40	1.0	1	YCⅣ6
	6	敲石	〃	8.60	6.30	3.55	266.8	1	YCⅡ360
第21図	14	石鏃	灰色ﾁｬｰﾄ	2.45	1.35	0.50	1.5	14	YCⅢ4T22
	15	磨石	砂岩	11.70	10.65	7.05	1.07	4	YCⅢ4T20
	16	石皿	〃	61.15	31.45	7.05	17,550.0	4	YCⅢ4T29
第22図	17	ﾏｲｸﾛﾌﾟﾚｰﾄﾞ	頁岩	1.60	0.75	0.20	0.2	4	YCⅡ36
	18	敲石	砂岩	9.75	4.10	2.90	136.9	4	YCⅡ104
	19	台石	〃	7.05	9.30	7.20	2,000.0	4	YCⅡ103
第24図	20	ﾌﾚｰｸ	頁岩	5.80	5.80	1.90	44.8	5	YCⅡ5Tソ
	21	ﾁｮｯﾊﾟｰ	砂岩(泥岩質)	13.45	17.20	5.40	946.7	5	YCⅡ470
第25図	27	石槍	頁岩	14.35	4.75	1.25	66.5	6	YCⅡ6Tソ
第27図	30	磨器	〃	10.05	8.40	2.90	230.5	11	YCⅢ11T1
第33図	34	石鏃	鉄石英(ﾁｬｰﾄ)	2.35	1.50	0.45	1.2	14	YCⅢ14T17
	35	〃	頁岩	2.80	1.95	0.25	1.5	14	YCⅢ14T14
	36	石斧	〃	10.15	6.30	1.80	117.0	14	YCⅢ14T2
	37	〃	泥岩	6.25	5.80	0.95	41.6	14	YCⅢ14T9
	38	ｽｸﾚｰﾊﾟｰ	ﾊﾘ質安山岩	4.00	5.05	1.20	20.3	14	YCⅢ14T6
	39	残核	〃	2.80	4.60	1.40	15.6	14	YCⅢ14T5
第36図	40	敲石	砂岩	6.20	7.50	3.65	184.1	16	YCⅣ16T(Ⅳ層)
	41	磨石	〃	12.40	5.80	1.85	212.4	16	YCⅣ16T(Ⅳ層)
	42	〃	頁岩	6.95	5.60	3.40	182.9	16	YCⅣ16T22
	43	ﾌﾚｰｸ	変成砂岩(石英脈)	7.95	4.65	1.50	55.7	16	YCⅣ16T17
第37図	44	石鏃	頁岩	2.25	1.20	0.35	0.9	表採	YCⅣﾄ
	45	ｽｸﾚｰﾊﾟｰ	ﾁｬｰﾄ	4.40	2.70	1.10	13.4	〃	YCⅡﾄ

第V章　科学分析

第1節　横峯C遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

1　試料と方法

No.	地点・層準	試料の種類	前処理・調整	測定法
1	1トレンチ1号礫群	炭化物	酸ーアルカリー酸洗浄	加速器質量分析
			石墨調整	AMS法
2	1トレンチ1号礫群	炭化物	酸ーアルカリー酸洗浄	加速器質量分析
			石墨調整	AMS法
3	1トレンチ台石周辺	炭化物	酸ーアルカリー酸洗浄	加速器質量分析
			石墨調整	AMS法
4	5トレンチ礫群	炭化物	酸ーアルカリー酸洗浄	加速器質量分析
			石墨調整	AMS法

2　測定結果

試料名	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	層年代	測定No. Beta-
No.1	31,290±690	−25.8	31,280±690	交点　＊＊＊	102399
No.2	29,660±540	−24.6	29,670±540	交点　＊＊＊	102400
No.3	30,480±590	−24.3	30,490±590	交点　＊＊＊	102401
No.4	29,300±520	−25.2	29,300±520	交点　＊＊＊	102402

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から，単純に現在（1950年AD）から何年前（ＢＰ）かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより，暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。

※　本試料の測定は，ドイツのキール（Kiel）大学の加速器を用いて行われた。

第２節　横峯Ｃ遺跡における花粉分析・植物珪酸体分析結果

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

横峯Ｃ遺跡は種子島南部の台地斜面上に位置する。本遺跡では，発掘調査により縄文時代草創期・早期の包含層，旧石器時代の２枚の文化層（下位よりⅠ文化層，Ⅱ文化層とされる）が確認されている。本遺跡では，前回，旧石器時代Ⅰ文化層の時代性を検証するために，礫群から検出される炭化材の放射性炭素年代測定が実施し，約３万年前以前であることが明らかにされた。

今回は，堆積物中に含まれる花粉化石の消長から本遺跡周辺の古植生について検討することが要望された。しかし，遺跡の立地条件および堆積物の状態から花粉化石がほとんど検出されないことが予測されたため，まず堆積部中に花粉化石が残存しているかを明らかにすることとし，古植生については植物珪酸体分析を併用して検討することにした。

１．試料

本遺跡の層序は，上位よりⅠ層～Ⅺ層に分層され，Ⅺ層がこれまでの発掘調査から約４万年前頃に噴出したと予想されている種Ⅲ火山灰，Ⅸ層が種Ⅳ火山灰，Ⅶ層が約22,000～25,000年前に噴出した（町田・新井，1992）とされるAT，Ⅲ層が約6,300年前に噴出した（町田・新井，1992）とされるK-Ahとされている。また，Ⅳ層に薩摩火山灰と呼ばれる火山灰が混入するとされている。

発掘調査によりＸ層が旧石器時代Ⅰ文化層，Ⅷ層が旧石器時代Ⅱ文化層，Ⅳ層下部（Ⅳｂ層）が縄文時代草創期包含層，Ⅳ層上部（Ⅳｂ層）が縄文時代早期包含層とされている。花粉分析・植物珪酸体分析試料は，Ｘ層・Ⅷ層・Ⅳ層下部（Ⅳｂ層）から採取された３点（下位より試料番号１～３）である（図１）。

２．分析方法

(1)　花粉分析

花粉・胞子化石は，湿重約10ｇの試料について塩酸処理，水酸化カリウム処理，篩別（250μm），重液分離（臭化亜鉛，比重2.3），フッ化水素酸処理，アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝９：１）の順に物理・化学的な処理を施して分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら，出現する全ての種類について同定・計数を行う。

(2)　植物珪酸体分析

湿重10ｇ前後の試料について，過酸化水素水・塩酸処理，超音波処理（70w，250KHz，１分間），沈定法，重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し，カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入し永久プレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現する短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体を，近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は，検出された種類と個数の一覧表として示す。

3．結果および考察

3試料とも花粉化石は全く検出されない。これは，遺跡の立地状況等を考慮すると，好気的な環境下であったために花粉化石が分解・消失したと考えられる。一方，植物珪酸体は検出個数が少なく（表1），概して保存状態が悪い。この要因のひとつとして，土壌の脱珪酸化作用が考えられる。蒸発量の多い亜熱帯湿潤気候下では，塩基や珪酸のかなり部分が溶脱するとされている。（松井，1988）。植物珪酸体は非結晶質の珪酸で構成されるため，このような脱珪酸化作用などの化学的風化作用の影響を受けることが十分に考えられ，土層中に包含されていた植物珪酸体が溶解した可能性がある。しかし，各層ともタケ亜科が認められることから，遺跡が立地する台地上やその斜面部などにはタケ・ササ類が生育していたと思われる。また，Ⅷ層・Ⅳb層でウシクサ族ススキ属が認められ，Ⅳb層でイチゴツナギ亜科が検出される。これらの種類は，開けた場所に生育する種類である。また，今回の調査ではAT直下の旧石器時代Ⅱ文化層および縄文時代草創期の包含層からイネ科起源の植物珪酸体の他に，近藤・ピアスン（1981）の樹木起源珪酸体Ⅲ型が検出される。この珪酸体は「Yの字」あるいは「くの字」状の形態を呈し，維管束細胞の篩部がケイ化したもので樹木葉部の観察できるとされている（近藤・ピアスン，1981）。これより，Ⅷ層やⅣb層が堆積した頃になると，遺跡付近の台地上には，木本類が生育する場所やイネ科草本類が生育する開けた場所が存在していた可能性がある。

表1　植物珪酸体分析結果

種類	Ⅳb層	Ⅷ層	X層
試料番号	3	2	1
イネ科葉部短細胞珪酸体			
タケ亜科	2	12	4
ウシクサ族ススキ属	1	6	−
イチゴツナギ亜科	−	4	−
不明キビ型	−	7	2
不明ヒゲシバ型	−	2	−
不明ダンチク型	−	3	3
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケ亜科	1	8	−
ウシクサ族	2	15	−
不明	2	7	−
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	3	34	9
イネ科葉身機動細胞珪酸体	5	30	0
総計	8	64	9
樹木起源			
Ⅲ型	20	15	−

ところで，本島北部の西之表市でもK-Ahの直下層や直上層および現表土で照葉樹に由来する植物珪酸体が認められ，K-Ah降灰以前に照葉樹林が成立していたとされている。（杉山・早田，1994）。九州地方における植生史研究によると，最終氷期最盛頃は基本的にマツ属・モミ属・トウヒ属・ツガ属などの針葉樹の花粉が多産しているが，広葉樹の花粉も低率ながら検出されている（例えば，HATANAKA，1985）。また，沖縄県で実施された花粉分析結果をみると，前期洪積世の新里層から既に照葉樹林要素が検出されており，約33,000年前の許田層でも単維管束亜属を含むマツ属・スギ科・ハイノキ属とともに低率ながらアカガシ亜属も認められている（松岡・西田，1978）。沖縄県北部の伊是名島で実施された花粉分析では，約23,000年前の層準でマツ属などの針葉樹とともに照葉樹林要素も比較的多く検出される花粉化石群集が得られている（黒田・小澤，1996）。今回検出される樹木起源珪酸体は，ブナ科・モクレン科・マンサク科（イスノキ）など照葉樹林要素となる分類群を含む種類の葉部に数多く含まれるとされているが，大部分の樹木の葉部に形成するとされている（近藤・ピアスン，1981）。これらのことを考慮すると，本地域にもAT降灰直前およびK-Ah降灰以前に照葉樹が分布していたか断定できない。本島の植生変遷史については

調査事例が少なく，今回のように基礎資料を収集することが重要である。さらに今後は，植物珪酸体以外にも材や種実遺体等の大型植物遺体を含めて資料を蓄積し，層序対比に基づいて人間を取り巻く植生変遷について検討することにしたい。

〈引用文献〉

Kenichi HATANAKA (1985) PALYNOLOGICAL STUDIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION SINCE THE WURM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS. Reprinted from Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University (Series B), 18, p. 29-71.

近藤錬三 (1976) 樹木起源の珪酸体について，ペドロジスト，20, p. 176-189.

近藤錬三・ピアスン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究（第２報） 双子葉被子植物樹木 葉の植物ケイ酸体について，帯広畜産大学研究報告，12, p. 217-229.

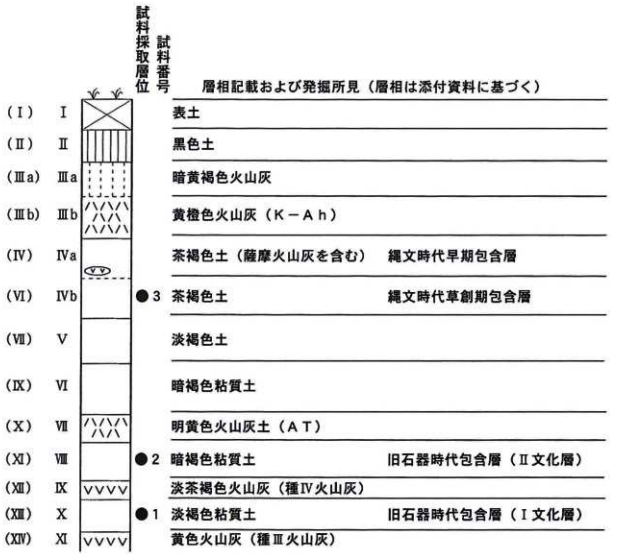
近藤錬三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25, p. 31-64.

黒田登美雄・小澤智生 (1996) 花粉分析からみた琉球列島の植生変遷と古気候．地学雑誌，105 , P. 328-342.

松井 健 (1988) 土壌地理学序説．p. 316, 築地書館.

松岡数充・西田史朗 (1978) 沖縄本島第四系の化石花粉（予報）．琉球列島の地質学研究，３, p. 123-128.

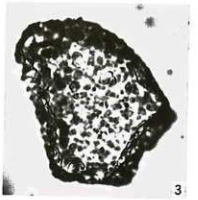
杉山真二・早田 勉 (1994) 植物珪酸体分析による遺跡周辺の古環境推定（第２報）ー九州南部の台地上における照葉樹林の分布拡大の様相ー．日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集，p. 53-54.

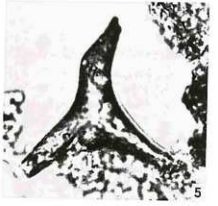


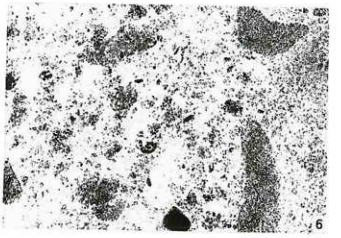
第38図　標準土層の模式柱状図および試料採取層位

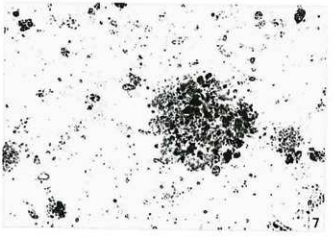
注）（ ）書きが第Ⅲ章第２節の層順である。

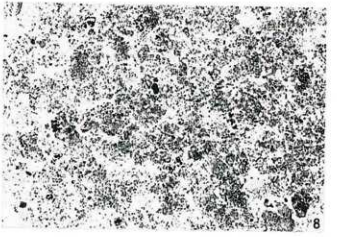
図版1　植物珪酸体・花粉分析プレパラート内の状況











100 μm
(6-8)

50 μm
(1-5)

1. タケ亜科短細胞珪酸体（試料番号2）
2. ススキ属短細胞珪酸体（試料番号2）
3. タケ亜科機動細胞珪酸体（試料番号2）
4. ウシクサ族機動細胞珪酸体（試料番号2）
5. 樹木起源：Ⅲ型（試料番号2）
6. 状況写真（試料番号1）
7. 状況写真（試料番号2）
8. 状況写真（試料番号3）

1～5：植物珪酸体　6～8：花粉分析プレパラート内の状況

第３節　横峯Ｃ遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

横峯Ｃ遺跡では，旧石器時代の遺構・遺物が検出されている。とくに，姶良Tn火山灰（ＡＴ）とその下位に堆積する種Ⅳテフラの間から叩石，種Ⅳテフラとその下位の種Ⅲテフラの間から礫器が出土しており，本地域の旧石器時代の遺跡を調査する際の編年指標として注目されている（桑畑・東，1997）。今回の調査では，ＡＴ火山灰の下位約10cmと，種Ⅳテフラ中からカーボン層が検出され，炭化材が多数出土している。

本報告では，これらの炭化材の樹種同定を行い，古植生および用材選択に関する資料を得る。

１．試料

試料は，ＩＴ地点のＡＴ下約10cmのカーボン層（G4a2区カーボン層）から出土した炭化材１点（試料番号１）と，同地点の種Ⅳ中のカーボン層（F4d3区カーボン層）から出土した炭化材１点（試料番号２）の合計２点である。

２．方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し，種類を同定する。

３．結果

炭化材は，いずれも保存状態が悪い。道管が認められることと，その配列から，散孔材の組織を有する広葉樹材であることは明らかであるが，樹種の同定には至らなかった。以下に各試料の観察結果について記載する。

・試料番号１

木口面では，木繊維等はほとんど潰れており，わずかに道管と軸方向柔細胞の一部が観察できる。道管は小径で，一様に散在している様子が観察できる。道管は階段穿孔を有するが，壁孔は観察できない。放射組織は，柾目面の観察から異性Ⅱ型と考えられるが，板目面では全く観察できないため，詳細は不明。軸方向柔細胞は，接線方向に配列する。

以上の結果から，イスノキに近い印象があるが，充分な観察ができず，本報告では広葉樹（散孔材）とする。

・試料番号２

試料番号１と同様に，木繊維はほとんど潰れている。道管は小径で，一様に散在する。道管の穿孔および壁孔は観察できない。放射組織は，木口面の観察から，幅は狭いと考えられるが，柾目面および板目面で全く観察できないため，詳細は不明。軸方向樹細胞は，接線方向に配列しているように見えるが，詳細は不明。

以上の特徴から，本資料についても広葉樹（散孔材）と同定した。

４．考察

試料は，いずれも散孔材で，試料番号１についてはイスノキの可能性がある。しかし，保存状態が悪く，断定には至らなかった。そのため，今回の結果から古植生や用材選択を明らかにすることは困難である。

本地域の古植生については，杉山・早田（1997）により，姶良Tn火山灰の下層でシイノキ属やイスノキ属等の植物珪酸体が認められており，最終氷期を通して暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）が分布していたことが指摘されている。この結果から，試料番号1がイスノキであれば，古植生と一致する結果といえる。

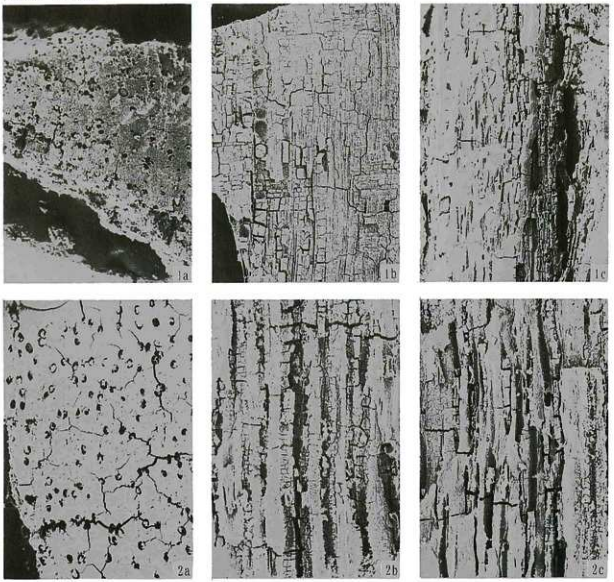
今後，同定可能な炭化材があれば，さらに同定を行い，古植生について明らかにしたい。

〈引用文献〉

桑畑光博・東　和幸（1997）　南九州の火山灰と考古遺物．月刊地球，19（4），p.208-214，海洋出版株式会社

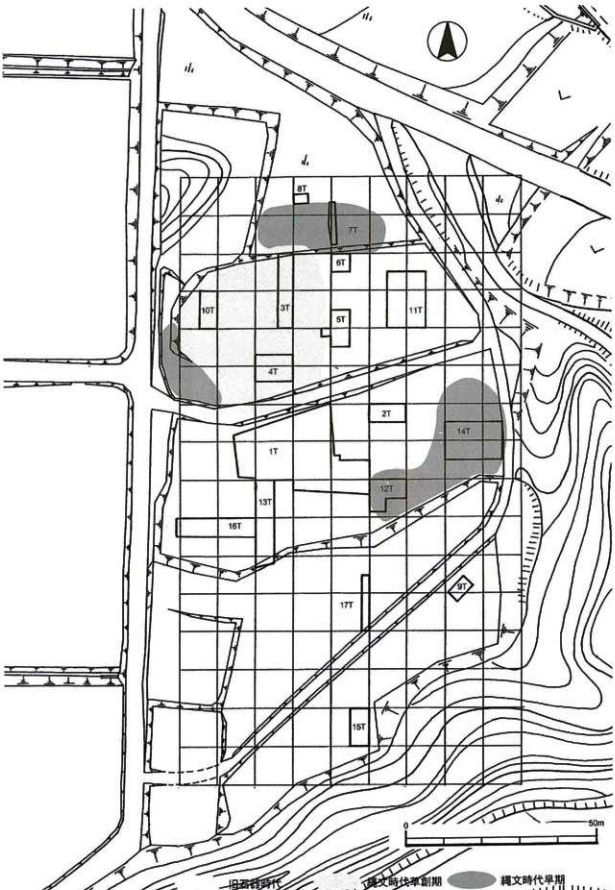
杉山真二・早田　勉（1997）　南九州の植生と古環境　－植物珪酸体分析による検討－月刊地球，19（4），p.252-257，海洋出版株式会社

図版2　炭化材



1. 散孔材（試料番号1）
2. 散孔材（試料番号2）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c



第39図　各時代の残存遺跡範囲図

第Ⅶ章　ま　と　め

礫群の発見（平成４年）以来，発掘調査を重ねるなかで，随分周辺状況が変化した。横峯Ｃ遺跡が種子島の旧石器研究の端緒を開き，またそれは奄美諸島の旧石器時代の資料をより意義づけることとなり，日本列島と大陸との関係（南方ルート）を見直し再検討する契機となった。平成９年の立切遺跡が全国的に報道されたが，横峯Ｃ遺跡があったから立切遺跡があり，こうした意味で，学史的にも重要な位置をしめる遺跡であろう。

発掘調査は，遺跡の保存を目的としており，各層で遺構が検出された場合は，基本的にその面で調査をやめている。例えば種Ⅳ火山灰層の上で遺構が検出された場合は，種Ⅳ火山灰層の下層については調査していない。下層にいけば調査面積が狭くなっていくということである。

本遺跡の最大の特徴は種Ⅵ火山灰下位の約31,000年以上前から縄文時代早期の約6,500年前までの時期に断続的に礫群あるいは集石という同様の機能をもつと考えられる遺構が形成される点にある。ＡＴ火山灰直上では，土坑の検出のみであったが，出土した石器は被熱している。旧石器時代で少なくとも３文化層，縄文時代で２文化層が存在する。１号礫群横において，下層確認を行ったところ，種Ⅲ火山灰と種Ⅳ火山灰の間ではローム層だけであったが，種Ⅱ火山灰以下に砂岩の破砕礫が出土した。さらに礫群が存在している可能性もある。また細石刃の出土は細石器文化期の遺構が存在する可能性もあり，火山灰を含めて種子島の旧石器時代から縄文時代早期までを網羅して，縦に見れる遺跡として極めて貴重である。

年代について，放射性炭素年代測定では，種Ⅳ火山灰の下の１号礫群で31,290±690，２号礫群で29,660±540，種Ⅳ火山灰直上の台石周辺で30,480±590，やや上位の５トレンチ礫群が29,300±520の数値がでている。中種子町の立切遺跡で種Ⅳ火山灰直下での30,480±210と勘案すると，種Ⅳ火山灰の年代は30,500年ぐらい前と考えてよく，そのさらに約10cmほど下位にあたる１号礫群については，確実に31,000年より古いと考えられる。約3.5万年前とされている前期旧石器の長野県石子原遺跡の礫群は，礫36個で構成され焼けについて明確でなく，その位置付けは留保されている。東京都下里本邑遺跡（武蔵野台地Ｘ層上部）が礫群の最古の例とされてきた。その後静岡県沼津市土手上遺跡で2,7～8万年前の礫群が検出されている。ＡＴ火山灰以下の礫群，とくにⅨ・Ｘ層段階では小型の礫群ばかりで（保坂　1986），本遺跡のように検出状況で200個（中型）前後の礫数で，掘り込みをもち，炭化物が集中するいわば完成された形状のものとしては，年代はもちろん現段階では日本最古のものであろう。

礫群は構造的には，掘り込みをもち集中するものと（１号礫群・２号礫群），環状となっており周辺にばらけた礫が散在するもの（３号礫群），散在するもの（４号礫群・５号礫群）がある。礫群の用途については，調理用施設とする説（金山　1984），調理用・暖房用とする説（辻本　1983）「石蒸し料理法」（保坂　1986）とする説があり，「日常性」と「非日常性」での論議（辻本　1987・保坂　1986）がある。ただ最近東九州自動車道関係で出土しているＡＴ上位の礫群は，大きめ（拳大）の礫が密集して，縄文時代の集石と良く似た本遺跡の礫群とは印象が異なり，ミルクストーンの可能性も指摘される。用途が単純に一様でないことをしめしていよう。こうした問題の解決にあたって，礫群の構成礫の点数や重量組成，接合関係や，花粉分析等の科学分析などの必要性など課

題が提示されている（辻本　1987）が，本遺跡では保存を前提としていたために，礫群を構成する礫そのものの諸属性の十分な情報を提示できなかった。

礫群と石器の位置関係には，ＡＴ火山灰下位で21と３号礫群，42・43と７号礫群，種Ⅳ火山灰下で６と２号礫群などのように，礫群から２ｍ～３ｍ離れて石器が出土する状況が伺われる。これは草創期の集石と隆帯文土器の土器群の出土状況とも通じるものであろう。

21・30などの残核を利用した石器があることから，石器に使える良質の石材の石核は，持ち歩いて必要に応じて剥離作業をおこなったものと考えられる。これらと考え併せて，礫群が分配集団の道具であり，集団構成員相互の分配活動の持続を確認するものとして，季節的に回帰してきたものとすれば（保坂　1996），こうした出土状況は理解できる。種Ⅳ火山灰とＡＴ火山灰の間の，３個の台石と炭化物，焼土等については「火処遺構」とした。人間が介在したものと考えられる。

遺跡の範囲については，旧石器の遺構はピンポイントである可能性もあるが，西側の谷や南から東へ回り込む谷の集約する谷頭に当たる第39図の範囲が遺跡範囲と考えられる。谷を挟んで南側からは遺物・遺構は発見できなかった。しかしながらより西側，つまり傾斜の下の方については畑地整備が完了しているとはいえ，さらに広がる可能性もある。

石器は，種Ⅲ火山灰と種Ⅳ火山灰の間では，敲石が出土しており，種Ⅳ火山灰とＡＴ火山灰の間では台石・敲石・磨石・礫器・石核・剥片類が出土した。明確な小型の剥片石器が出土しないとしてきたが，４・５にみられるような石核と剥片と，30の礫器からは，在地の石材を利用した剥片石器類が存在すると考えられる。また21からは良質の石材の剥片石器も存在したと考えられる。但し現状では極端に少なかったといわざるを得ない。やはり石器組成の特徴は，敲石・磨石が顕著で，剥片石器が少ないことである。また剥片類については，礫群に使用される赤色砂岩や敲石・磨石に使われる砂岩と異なり，43のように石英脈をもつやや硬質の砂岩を利用するものがある。種Ⅳ火山灰の上下の文化層では，立切遺跡では種Ⅳ火山灰下の石器群が，横峯Ｃ遺跡ではＡＴ火山灰下の石器群がより明確に把握できる。いまのところ種Ⅳ火山灰を挟んで共通の石器群をもつと考えられる。石材については，島内の石材のみである。

縄文時代草創期包含層と種Ⅳ火山灰の上下の旧石器時代文化層について，花粉分析および植物珪酸体分析を行った。花粉化石は全く検出されなかったが，植物珪酸体分析では，縄文時代草創期包含層とＡＴ火山灰下と種Ⅳ火山灰の間の包含層から，イネ科起源の植物珪酸体のほかに樹木起源珪酸体Ⅲ型が検出された。これにより，遺跡周辺の台地上には，両時期ともに，木本類の生育する場所やイネ科草本類が生育する開けた場所が存在していた可能性があるとされている。なお樹木起源珪酸体Ⅲ型は照葉樹林要素となる分類群を含む種類の葉部に数多く含まれるともされている。炭化材の樹種同定では，ＡＴ火山灰下位と種Ⅳ火山灰下位からそれぞれ広葉樹（散孔材）として，樹種ではイスノキの可能性を指摘している。種Ⅲ火山灰やＡＴ火山灰の上下からブナ科シイ属やマンサク科（イスノキ）の植物珪酸体が検出され，最終氷期を通して照葉樹林が分布したことが確かめられており（杉山・早田　1997），本遺跡の結果はこれに沿うものである。

こうした状況から岡村道雄氏は「日本列島の南には，より温暖な環境に適応した植物性食料への依存度が強い，異質の文化が分布していたらしい。」として，後期旧石器時代前半に敲打器文化圏として南西諸島文化圏を設定した（岡村　1998）。また小田静夫氏は種子島の重量石器を特徴とす

る旧石器群を「南方型旧石器文化」として位置付け，関東の石器群にもその系譜が認められるとする（小田　1999）。これに対して橘昌信氏は「礫塊石器が石器組成の主体を占める種子島の旧石器文化が，九州本土の旧石器文化とは異質なより植物食料に依存した旧石器文化として把握できる可能性」を指摘しながら，種子島の自然環境と鹿児島県本土南部，特に沿岸地域のそれと対比したときに，石器組成の違いに大きく関わるほどの自然環境の相違が認められるのか，剥片石器が移動時の搬出が常に行われていた結果，調査時例の少なさから現在の状況を呈しているのか，検討が必要であるとして学際的な視野からの総合的な研究の必要性を主張している（橘　1999）。横峯C遺跡や立切遺跡では，磨石や敲石の多さが注目され，確かに植物食料により依存した可能性があるが，剥片石器は存在すると考えられ，今後定形的な剥片石器の資料から再検討される必要がある。長い旧石器時代の多様な環境変化が起こった時代に対して，旧石器時代は狩猟中心の単一的なイメージを持ち過ぎていたのかも知れない。そうした旧石器時代観のイメージを転換させた意義は大きい。藤本強氏は「日本列島の後期旧石器文化の中には，植物の利用がかなりの比率で安定した形で存在しており，それはシステムとして，少なくとも日本列島南部においては，当初から持ち合わせていたものであることが明らかになっている。」として，立切遺跡の例をはじめとする南九州の様相は，地球規模で旧石器時代の生業を考える際に重要な役割を果たすことになる（藤本　2000）と指摘している。

以上述べたように，日本列島の後期旧石器時代の石器群の系譜や生業を考えるうえで重要な遺跡と位置付けられる。

縄文時代草創期では，隆帯文土器が出土し，それに伴う集石と磨石・石皿のセットが検出されている。種子島では現在8ケ所で隆帯文土器の出土が知られているが（大久保　1997），遺構を伴う遺跡は，西之表市奥ノ仁田遺跡と中種子町三角山Ⅰ遺跡と３例目である。サツマ火山灰がブロック状に点在することを確認でき，その下から隆帯文土器や遺構を検出したことは，九州島の隆帯文土器と比較検討でき，おおきな成果であった。縄文時代早期については，平成４年度に中央の道路を除いて畑地整備で影響される部分については調査を終了している。今回はその周辺部分で縄文時代早期の遺構と包含層がまだ残存していることが確認できた。特に14トレンチの集石は良好な状態で，旧石器時代からの一連の遺構の変遷をみるうえで，貴重な資料である。縄文時代早期の苦浜式土器を再評価した遺跡であり，石器の石材からも広域な交流圏が裏付けられた遺跡でもある。ちなみに石材は姫島産の黒曜石や針尾島のハリ質安山岩や，産地は特定していないが黒曜石が出土している。

遺跡の重要性については，述べてきたところであるが，町長をはじめ熊毛支庁土地改良課等農政部局の方々がよく理解され，その協力のもとで遺跡が保存された。今後は発掘調査の結果を踏まえ，遺跡の整備・活用に向けて具体的に積み上げたい。埋蔵文化財保護行政としては，まだ道半ばであり，今後とも文化庁・鹿児島県文化財課の指導・連携のもとで責任を担って行きたい。

参考文献

下里本邑遺跡調査会　1982　『下里元邑遺跡』

日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会　1983　『長野中央自動車道埋蔵文化財包含地発掘調査報告書－飯田市地内－その３』

辻本崇夫　1983　「礫群研究の現状と問題」『東京の遺跡』Ｎｏ４

金山喜昭　1884　「武蔵野・相模野硬台地における旧石器時代の礫群の研究」『神奈川考古』第19号

保坂康夫　1986　「先土器時代の礫群の分布と背景」　『山梨考古学論集』Ⅰ

辻本崇夫　1987　「礫群の形成過程復原とその意味」『古代文化』第39巻第７号

保坂康夫　1993　「礫群構成礫の割れ（破断）に関する実験的研究」『考古論集』　潮見浩先生退官記念論文集

保坂康夫　1996　「遺跡内の空間構造（礫群分布）」『旧石器文化研究』５　石器文化研究会

杉山真二・早田勉　1997　「南九州の植生と古環境」『月刊　地球』19　海洋出版

大久保浩二　1997　「瀬戸口遺跡採集の隆帯文土器－種子島の縄文時代草創期遺跡一覧－」『南九州縄文通信』南九州縄文研究会

岡村道雄　1998　『歴史発掘①　石器の盛衰』　講談社

堂込秀人　1998　「種子島の旧石器文化」『日本考古学協会1998年度大会　研究発表要旨』日本考古学協会，および『日本考古学協会沖縄大会資料集』

橘　昌信　1999　「南九州の旧石器文化」『鹿児島考古』第33号　鹿児島県考古学会

小田静夫　1999　「琉球列島旧石器文化の枠組みについて」『人類史研究』第11号　人類史研究会

藤本　強　2000　「植物利用の再評価－世界的枠組みの再構築を見据えて－」『古代文化』　第52巻第１号

図　　版

発掘作業状況

図版２

１トレンチ１号礫群

１号礫群断面

1トレンチ1号礫群掘り込み状況

1トレンチ2号礫群検出状況

図版4

〈平成8年度〉

1トレンチ2号礫群（西から）

2号礫群（東から）

1トレンチ遺構検出状況（西から）

1トレンチ火処

図版6

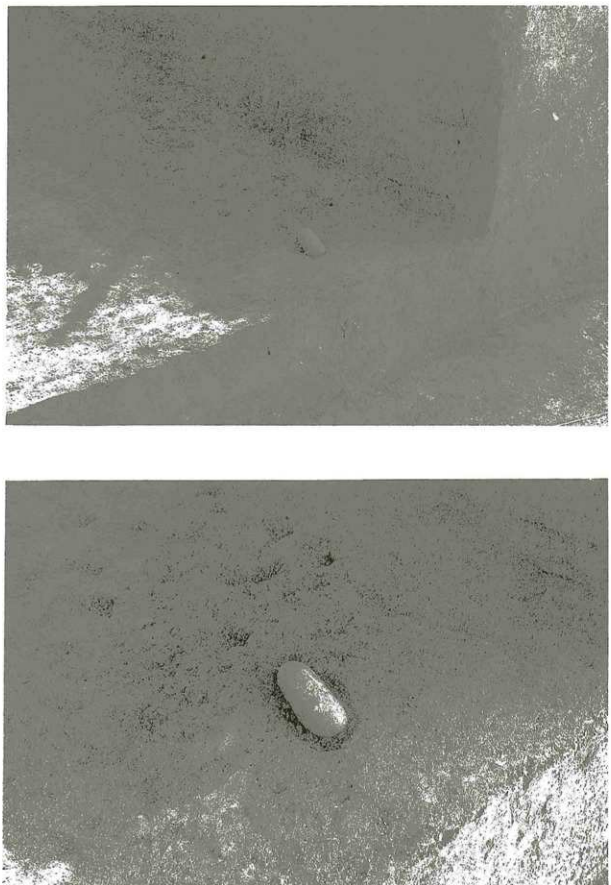
1トレンチ（東から）

台石周辺カーボン検出状況

カーボン検出状況

1トレンチ全景

図版８



１トレンチ敲石出土状況（種Ⅳ火山灰直下）

1号礫群横
下層確認
(口絵カラー)

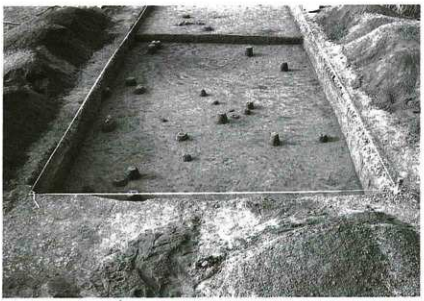
1トレンチ北壁

1トレンチ東壁

図版10

2トレンチ
礫出土状況

3トレンチ
縄文時代草創期
遺物出土状況



3トレンチ
縄文時代草創期
遺物出土状況

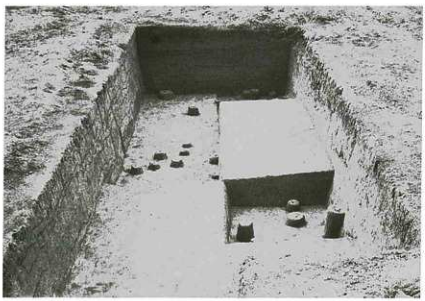
3トレンチ草創期集石遺構検出状況

縄文時代草創期集石

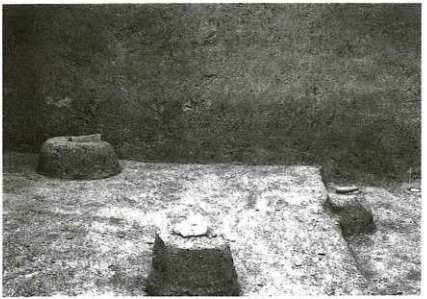
図版12

3トレンチ深堀状況

4トレンチ
縄文時代早期
遺物出土状況

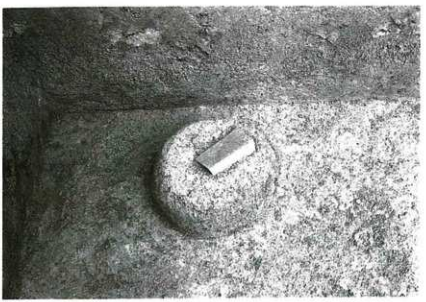


4トレンチ
ＡＴ以下出土状況



4トレンチ
種Ⅳ直上（ＡＴ下位）
台石及び敲石出土状況

敲石

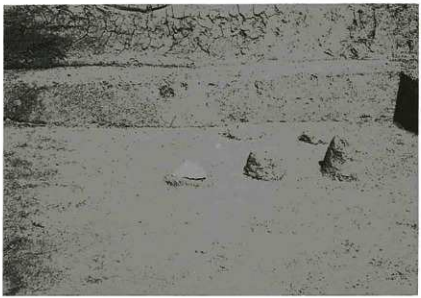


台石

図版14

5トレンチ
3号礫群検出状況

3号礫群
検出状況



ＡＴ下位
礫器出土状況

5トレンチ3号礫群

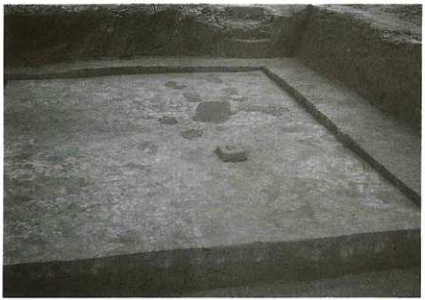
3号礫群

図版16

6トレンチ土層

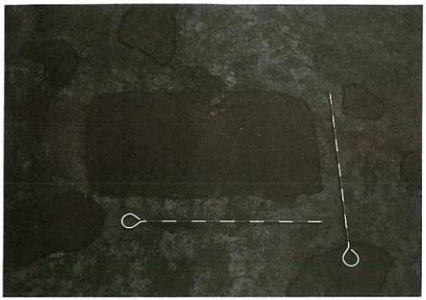
6トレンチ
槍先出土状況
(縄文時代早期)

7トレンチ土層

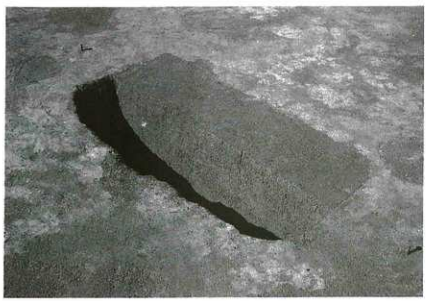


〈平成９年度〉

１トレンチＡＴ直上
土坑及び石器検出状況

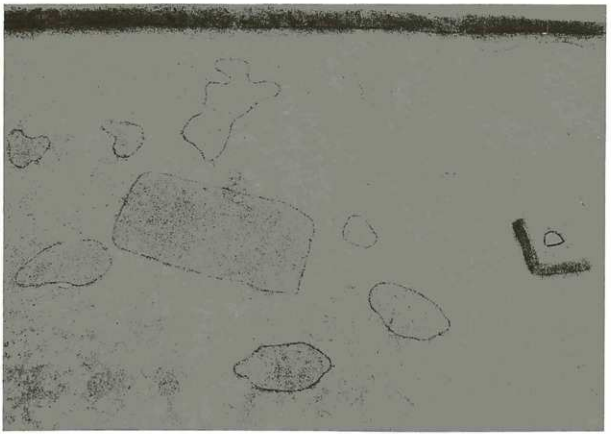


土坑



土坑半截状況

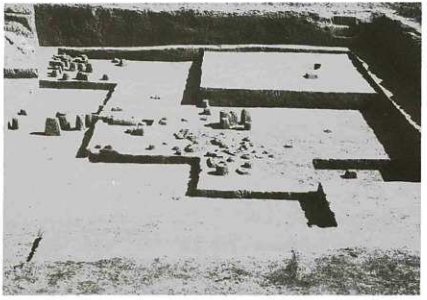
図版18



1トレンチ土坑及び石器

1トレンチ4号礫群（種Ⅳ下位）

1トレンチ
拡張部遺構検出状況
（東から）



（西から）

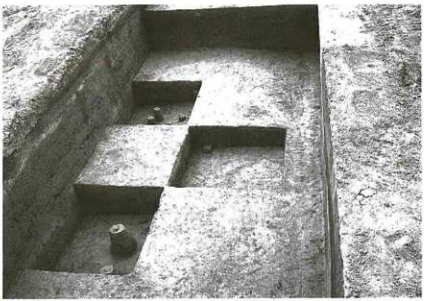
4号礫群

図版20

4トレンチ
遺物出土状況

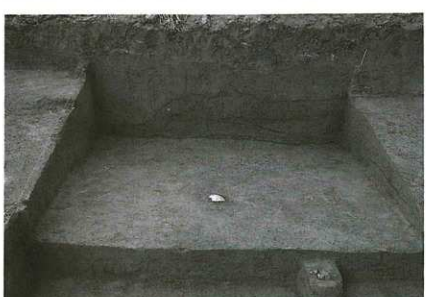
石皿及び磨石
出土状況

10トレンチ
遺物出土状況



10トレンチ
ＡＴ位礫出土状況

11トレンチ全景

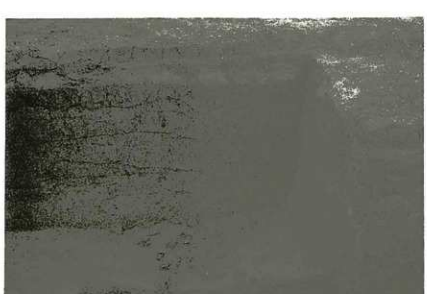


11トレンチ
礫器出土状況
（種Ⅳ直上）

図版22

5トレンチ礫器(No.30)

12トレンチ
5号礫群検出状況



5号礫群検出層位

13トレンチ調査状況

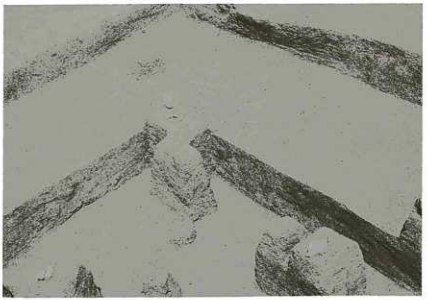
14トレンチ
遺構検出状況

縄文時代早期1号集石

図版24

14トレンチ1号集石

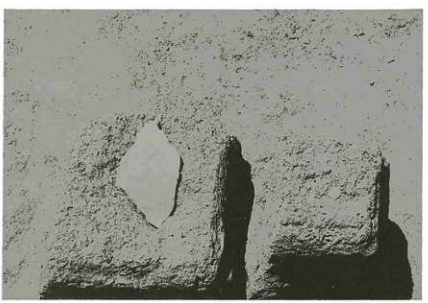
14トレンチ2号集石



〈平成10年度〉

1トレンチ拡張
ＡＴ下位遺物出土状況

石核



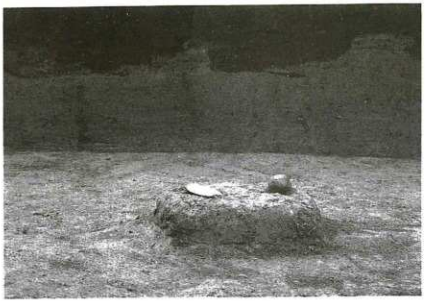
剥片

図版26

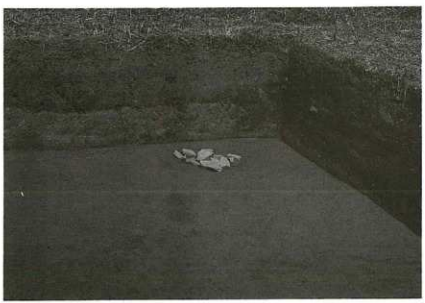
1トレンチ拡張
6号礫群

4号礫群
カーボン検出状況

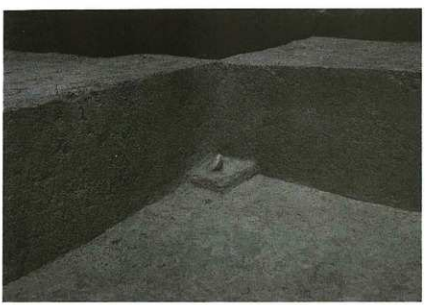
17トレンチ土層



16トレンチ
縄文時代遺物出土状況



縄文時代早期
4号集石



種Ⅳ直上
磨石出土状況

図版28

16トレンチ磨石(No.42)

ＡＴ下位フレーク
(No.43)

16トレンチ
遺構検出状況

16トレンチ４号集石

16トレンチ７号礫群

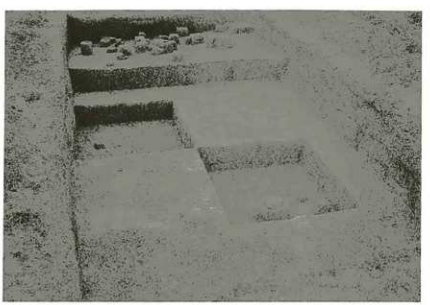
図版30

16トレンチ７号礫群検出状況

12トレンチ５号礫群

14トレンチ下層確認

14トレンチ下層確認



15トレンチ
礫出土状況

図版32

作業状況
（1トレンチ拡張）

作業状況
（16トレンチ）

埋め戻し状況

町三役視察

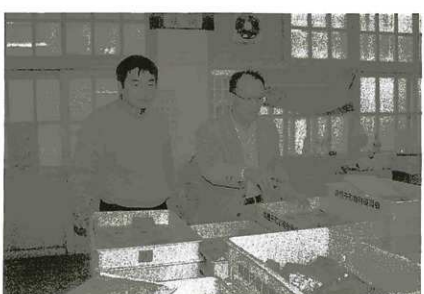
河口貞徳先生
現場指導

別府大学教授
橋昌信先生
現場指導

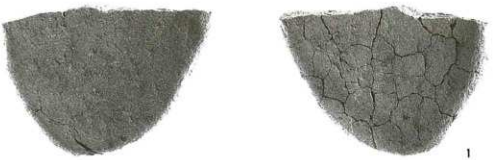
図版34

文化庁　岡山道雄先生
現場指導

文化庁　小林克先生
現場指導

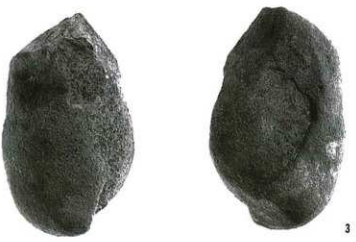


岡山大学教授
稲田孝司先生
遺物指導



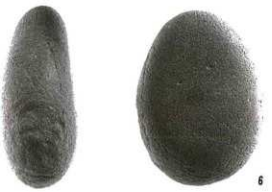
1

2

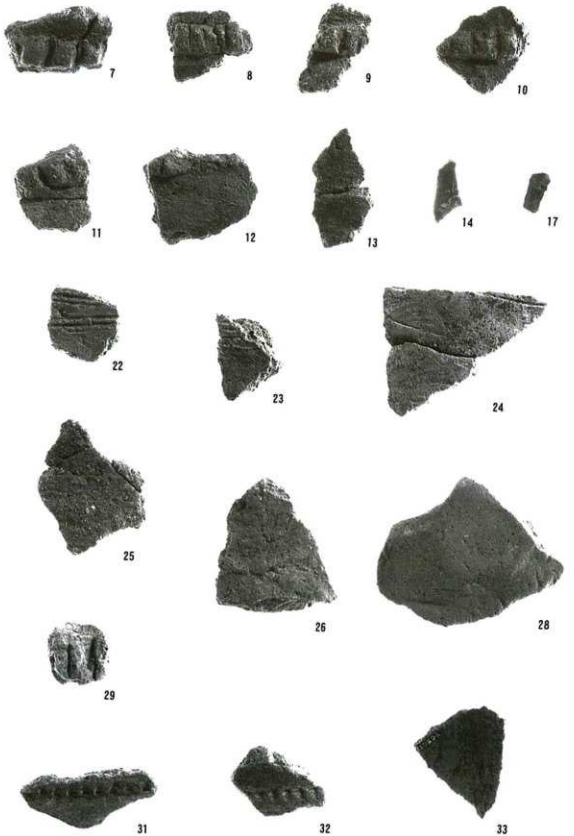


3

遺物写真(1)

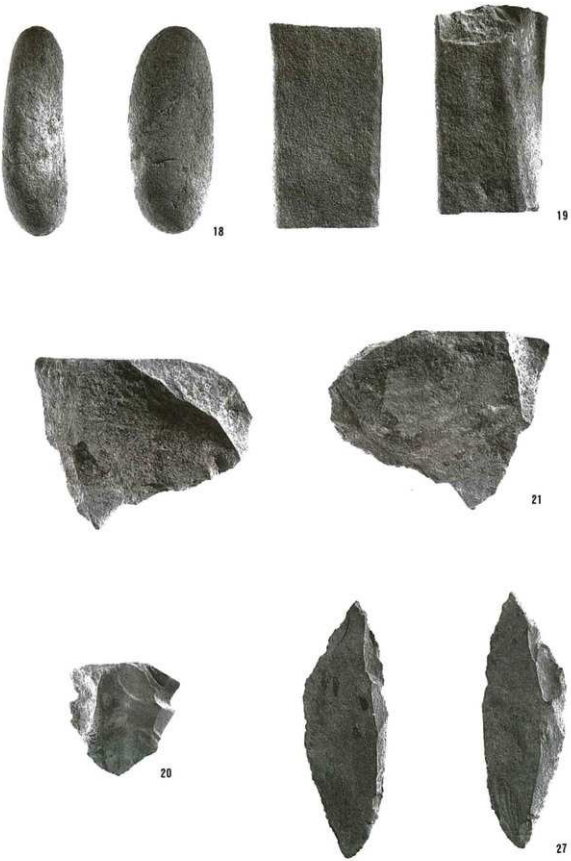


遺物写真(2)



遺物写真(3)

図版38



遺物写真(4)

30

34

35

38

39

36

37

遺物写真(5)

40

47

42

43

遺物写真(7)・横峯D遺跡出土隆帯文土器

図版42

発掘作業参加者
平成８年度

平成９年度

平成10年度

整理作業員の方々

あ と が き

「石器が出土しない……。」不安と苦悩の日々が続く担当者と，黙々と投じり鎌を動かす発掘作業員に，真夏の日差しは容赦なく照りつける。張り巡らした遮光ネットの下で，時折吹いてくる南国のさわやかな風が心を洗う。

「これでいいのか。」そう感じたのは，中種子町立切遺跡で出土した石器を見たときであった。これまで，礫群の周辺に剥片石器の散在する夢ばかりを追いつづけ，固定観念を持っていた自分に気がついたのであった。種子島には種子島独自の文化があることの大切さを勉強させられた発掘調査であった。

出土する遺物が少ないにもかかわらず，連日大粒の汗を流しながら発掘に協力をしてくださった作業員の皆さんに心から感謝したい。

あれは昨年の６月，梅雨時期に入ったある発掘調査の期でのことであった。一人の年配の作業員さんが，にこにこして「テレビで槍のことを放送していました。」と言いながら持ってきたのは，小さな紙切れに写し書いた図であった。それは宮城県中島山遺跡で出土した中期旧石器時代の石槍のことであった。丁寧に書かれたその図をみて，担当者としてこれほど感激したことはなかった。なぜなら，これまで図を添えて話してくれた作業員さんは初めてのことであったからである。埋蔵文化財に興味を持ち始めてくれているこの気持ちを，とても嬉しく思ったことであった。

この仲間たちと，これからも遺跡保存のために努めたいと心を新たにしている。　（坂口）

最後に図面は新しい方からレイアウトしながら，文章は古い方から記述している。読みづらい結果となり，お詫びしたい。また英文要約についてはランキン氏にお手数をかけた。専門用語が多いなかで，分かりやすく説明されている。忙しいなかでありがとうございました。　（堂込）

SUMMARY

Written by: Hideto Dogome
Translation by: Masako Rankine (Okawa)

The Yokomine 'C' site is located in Minamitane Town, Tanegashima Island, Kagoshima Prefecture. The Yokomine stone mound is considered the oldest ever found in Japan. It adds to the study of the beginning of the Paleolithic Age by expanding what can be derived from the data collected from Amami Island, and by presenting an opportunity to re-analyze the relationship between the Japanese Archipelago and the Asian continent via the Southern Route.

Another site, the Tachikiri site, was first reported in Japan in 1997. Due to the discovery of the Yokomine 'C' site in 1992, the Tachikiri site was found. As a result, the Yokomine 'C' site's discovery was very important.

At Yokomine, layers consist of, from the surface, Akahoya volcanic ash, AT volcanic ash, Tane-4 volcanic ash and Tane-3 volcanic ash. Since there are no other properties present, it's easy to date. The main feature of the mound are cooking surfaces which exist under the Tane-4 volcanic ash layer. These were formed from more than 31,000 years ago to about 6,500 years ago (early Jomon period). There are at least three layers containing remains from the Paleolithic Age, with two from the Jomon period.

By employing radiocarbon dating, the age of Tane-4 volcanic ash was demonstrated to be about 30,500 years old. The Number 1 stone mound which exists 10cm under this layer is therefore older than 31,000 years. It is arguable, then, that this is the oldest known cooking surface in existence.

In the layer above the Tane-4 volcanic ash, three anvil stones and burnt soil were found, suggesting the archaeological features of a fireplace and the ruins of a dwelling.

Hammer stones were excavated between the Tane-3 volcanic ash and Tane-4 volcanic ash layers, and between Tane-4 volcanic ash and AT volcanic ash layers, anvil stones, hammer stones, grind stones, pebble tools, cores and some materials of flake tools were found. Most tools excavated were hammer stones and grind stones, with a few flake tools recovered.

At the Yokomine 'C' site, from the stone tools found under the AT volcanic ash we can understand clearly the life of the people

who lived there. We consider the stone tools above and under the Tane-4 volcanic ash layers to be the same. Further, these specific stone tools were only found on Tanegashima Island.

A pollen analysis and a plant opal analysis of the layer containing cultural remains from the Incipient Jomon period and the Paleolithic Age were completed. From the plant opal analysis, the existence of an open grasslands-type area where woods, plants and grasses grew was found. From the wood composition analysis of the AT volcanic ash and Tane-4 volcanic ash layers, it is possible to say that *distylium racemosum* (Sieb. et Zucc.) grew as a broad leaf tree. This demonstrates that it was warm throughout the last glacial period and that the lucidophy(laurel) ilous forest was well- distributed.

We excavated Incipient-Jomon pottery decorated with clay ridges under Satsuma volcanic ash at the Yokomine 'C' site which was more than 12,000 years old. At the same time, a set of gathered pebbles, grind stones and stone plates was found. This allowed for a comparison with pottery from Kyushu Island, expanding our knowledge about the origin of pottery from the Jomon period. The stone tools prove larger geographic area of trade and exchange than previously thought.

As a result of this excavation, one theory that presented itself is that in the first half of the Late Paleolithic Age, in the Southwest Islands, pecking tools were used because, largely, plants were eaten. The stone implements, like the heavy stone tools found in Tanegashima, can be grouped among the old stone implement culture of the South, which further fits into the Kanto region's genealogy of stone tool use.

Though there were many environmental changes, we might have had a simpler image of the people in the Paleolithic Age as primarily hunters, but the excavation shed greater light on this period. In the culture of the Late Paleolithic Age in the Japanese Islands, people ate a plant-based diet. And at least in the southern Japanese Archipelago, people did so systematically from before the Jomon period began. This unique aspect of Southern Kyushu, including the Yokomine 'C' site, performs an important role when we consider, worldwide, studies of the Late Paleolithic Age.

南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

横峯C遺跡

編　集　〒891-3701 熊毛郡南種子町中之上2793－1
南種子町教育委員会
TEL（09972）6－1111
印刷所　株式会社 トライ社
〒892-0838 鹿児島市南林寺町12－16
TEL（099）226－0815

横峯地区から望む脱久島